

リレーメルヘン⑪

一冊の白い本



はじめに

各務原市と敦賀市の小学生が創作した「リレーメルヘン」は今年で十一集目になります。

今回は各務原市から敦賀市の小学生へとリレーされました。

九十一名の思いが込められた十七の世界です。

どうぞお楽しみください。

もくじ

1	僕の望む世界	那加第一小・敦賀南小	1
2	ゆうれい相談所	蘇原第一小・栗野小	17
3	ラッシー国のお姫様	中央小・咸新小	32
4	恐怖はとつぜんに……	尾崎小・栗野南小	43
5	スタート	那加第二小・敦賀北小	54
6	八月三十一日に	稲羽東小・中郷小	67
7	一冊の白い本	各務小・中央小	82
8	桜の森のひみつ	川島小・赤崎小	95
9	時空をこえた旅	稲羽西小・栗野南小	107
10	くり返す冒険	鵜沼第一小・松原小	118
11	開かずのトビラの謎	鵜沼第二小・敦賀西小	129

12	タイムスリップ 双子の未来旅行	那加第三小・東浦小	…	140
13	夏休みのミラクル	八木山小・黒河小	…	152
14	屋根うら部屋と不思議な本	鵜沼第三小・常宮小	…	168
15	イチゴ	陵南小・中央小	…	182
16	5つのキーワードを探せ！町に隠された暗号！	緑苑小・西浦小	…	196
17	うさぎのピョン太と不思議なブックランド	蘇原第二小・沓見小	…	208
あとがき				
	各務原市立稲羽東小学校長	中島 玲子	…	228
	敦賀市小学校教育研究会学校図書館部長	福住 龍二	…	230
	各務原市立中央図書館長	小林 義博	…	232
	敦賀市立図書館長	竹本 正和	…	234

表紙／挿絵 南里たい子

*文中の★はつなぎの箇所です。

僕の望む世界

各務原市立那加第一小学校

六年

林 はやし

栄里 えり

伊藤 いとう

佑夏 ゆうか

今井瑠弥菜 いまいるみな

←

敦賀市立敦賀南小学校

六年

富田 とみた

明花 めいか

仲野由梨亜 なかのゆりあ

「大介、早く学校に行かないとちこくするわよ」

お母さんは毎朝必ずぼくに言う。

学校にはぼくをいじめるボスがいる。そいつは、ぼくのお母さんがいる前ではおとなしいのに、お母さんが見えなくなるといじめてくる。だから学校に行きたくない理由を話しても、決して聞き入れてもらえない。ぼくはそんな世の中がいやで学校をさぼった。学校へ行くふりをして、静かな図書館へ行った。学校が終わるころ、ぼくが家に帰ろうとすると、ダンボール箱の上に犬が二本足で立っていた。

（えっ、何で犬が立ってるの！）

ぼーっと見ていると、とつぜん犬が話し出した。

「何でおまえ学校に行ってないんだよ」

「な、なんでそのことを……それに君はだれ？」

ぼくは犬がしゃべっているのもびっくりしたけれど、ぼくが学校に行ってい

僕の望む世界



ないことを知っているのが一番びっくりした。

「おれの名前はベラ。大介が生まれた時からずっと君のことを監視していたんだ」

「はあ!？」

ぼくはびっくりした。こんな長い間監視されていたのに気づかなかったなんて。

「ところで大介、君は何もかも思い通りになる世界に行きたくないかい？」

「まあ、行きたいけど」

ぼくは、そんな世界に行けるなんて夢のように感じた。だって、あのボスに復讐できると思ったから。そんなうかれた気持ちになるとベラが話し出した。

「大介、それならこっちへ来てくれ」

なんだろうと思いついて行くと、そこには大きな木があった。そして

木の幹にはドアがついていて、中に入れそうな感じだった。ベラにつられて中に入ってみると、とてもきれいな世界だった。すると、ベラが言った。

「自分が思うような世界を頭の中で描きながらドアをくぐってごらん」

「うん。わかったよ、ベラ」

ぼくは不思議に思ったけど、ベラを信じてみることにした。

ドアを開ける時、ぼくは、すぐドキドキした。これから、何が起きるのだろうか。ドアを開けたしゅん間……あれ、ここはさっきの森と同じじゃないか。でも……。

「ベラがいない」

たぶんベラは、ぼくが怒ると思って逃げたんだろう。家に帰ると、お母さんがやさしく話しかけてきた。

「大介、おかえり。大介がほしがっていた犬を買ってきたわよ」

（変だな。いつもなら、おかしすら買ってくれないのに）

「えー、どれどれ？ 早く見せて」

ぼくはお母さんの機げんをそこねないようにそう言った。

「犬は大介の部屋にいるわよ」

お母さんは言った。

「へえ。早く見たいなあ」

部屋に入ると、ぼくのベッドの上でミニチュアシュナウザーが二本足で立っていた。

（あれ？ どこかで見たことあるぞ）

「やあ、大介。やっと帰って来たか。待っていたんだぞ」

犬がしゃべってる。ってことは、ベラだ。

「君、ベラかい？ やっぱりベラだよね」

「なんだ。一週間も会ってないような顔してるな」

ぼくは、何がどうなってるのか早く聞きたかった。

「ベラ、お母さんは、どうなっているの？」

「まあ、落ち着け。一回学校へ行ってみようじゃないか」

「やだよ。だってあのボスがいるんだもん」

ぼくは、

（ベラ、おかしいんじゃないの？）

と思った。

「とにかく、行ってみればいい」

「う、うん、わかった。そんなに言うんだったら行くよ」

ぼくは、しょうがなく学校に行った。

学校に行くと、やっぱりあのボスがいた。とてもこわかった。だけどボスは、やさしくぼくに話しかけて来た。

「いっしょに遊ぼうよ」

ぼくは、頭の中がパニックになった。ベラがぼくに話しかけて来た。

「これで分かったかもしれないけど、あのドアをくぐったしゅん間に、君の描いた世界が現実になったんだよ。これが君、いや大介の望んだ世界なんだよ」

「こんな世界いやだ、いやだよ」

ぼくは、気がついた。

「ベラ、ぼく間違っていたよ。……でも、ありがとう」★

(ぼくの望む世界を叶えてくれたのは嬉しいけど……)

「でも、でも……」

「でも、なんだい？」

「元の世界に戻りたい」

「おれは、大介の願いを叶えてあげたんだよ。だから、そう簡単に戻してあげることができない」

「どうして！ ぼく、このままこんな世界にいるなんて楽しくないよ……」

ぼくは泣いた。こんな世界、全然楽しくないよ。本当のみんなといたい！

望んだ世界のボスやお母さんは、本当のボスやお母さんじゃないから！

「……まあ、一つだけ方法はあるが……」

「何？ 教えて！ 元の世界に戻れるなら、ぼく、なんでもするよ！」

「それは自分の気持ちに素直になること……。早く教室に戻れよ。次の授業、ちこくするぞ」

その時、チャイムが鳴った。それと同時にベラも消えた。

授業が始まった。ぼくの頭の中をベラが言っていた言葉が横切った。

（素直になるって言われても……）

やっぱり、ぼくは元の世界に戻りたい。なんとしてもベラに元の世界に戻してもらおう。そう心に決めた。

チャイムが鳴った。休み時間だ。皆がぼくの周りにやってくる。

「ねえ、大介君！ 一緒に遊ぼう！」

どう見てもみんな違う。嬉しいのか嫌なのか分からない。

ボスがやってきた。どうしよう。怖い。

「あつ、ちよつとトイレ行ってくる」

「分かった！」

ぼくはトイレに向かった。トイレにベラがいた。

「何で、ここにいるんだ？」

「大介の様子を見に来たんだ」

「ふ、ふーん。それで？」

「どうだ、望む世界は？」

「……」

「望んだ世界の方が良いのか？ 大介」

「……早く元の世界に戻してよ！」

「大介は、まだ素直になれてない」

「だから、どういう意味？」

「教えない。じゃあな」

（なんで教えてくれないんだよ！）

気がつくと、ベラがいない。でも、チャイムが鳴ったので教室に戻ることにした。ポーツとしていたので、授業は、あつという間に終わった。

給食の時間だ。ボスは今日もまた、給食そうだつ戦に参加している。今日のメニューは、ポトフとハンバーグとコッペパンに牛乳か……。あつ、ハンバーグが好きなんだよなあー。

でも、今日もボスが勝ち取ると思い、参加はしなかった。

「やっぱり、今日もボスが勝ち取ったか……」

「おーい、大介君！ これあげるよ！ 大介君、ハンバーグ好きだっただろ？」

「えー！ いいの。ありがとう」

（ぼくの好きな食べ物ボスが知っていたなんて……。でも、これは現実の世界じゃないから嬉しくない。あー、早く帰りたいっ！）

昼休みだ。

「一緒に遊ぼう！」

とボスは言う。ぼくは断ることができなかった。

「うん。いいよ」

と言った。

「ドッジボールしようよ！ ボール取ってくる！」

ボスが行ってしまった。ボール怖いんだよなー。いざとなると、こしがぬけてしまふんだよなー。

ドッジボールが始まった。

「大介君！ ぼくが教えてあげるよ！ 大介君とボールが友達になればいいんだよ。ぼくと大介君みたいにね」

そして、ボス率いるぼく達のチームは勝った。みんなが応えんしてくれたおかげかも……。ボスは、

「やったな！」

と言うので、ぼくも、

「やった！」

と返した。

下校の時間だ。ぼくは色々な事を考えながら歩いて家へ戻った。家にはベラがいた。ぼくは無視してリビンググへ向かった。リビンググにはお母さんがいた。お母さんは、

「大介、お帰り！ 早かったわね！ ケーキ食べる？」

と言った。ぼくはそういう気分じゃなかった。だから、

「いない」

と言った。いつのまにかぼくは、寝てしまった。ハッと気がつくとき、もう夜だった。お母さんは夕ご飯を作っていた。

「あつ、起きたの。もうちょっとで夕ご飯できるから待っててね」

（こんな優しいお母さん……。正直嬉しい。でも、こんなお母さんはいらない！）
そう思っていた時にはもう夕ご飯ができていた。ぼくはさっさと食べて、部屋にこもった。部屋の中でぼくはずっと自分自身をふり返っていた。

（ぼくは今までずっと自分に負けていた。自分は何もせず、学校へも行かずに、ボスに復讐しようなんて考えていた。ベラに元の世界に戻してもらって、自身を変えよう！）

「やっど、素直になれたな」

「あつ、ベラ！」

「大介、やっど素直になれたな。元の世界に戻してやる」

ぼくはわくわくしながら大きな木に向かった。ぼくはドアを開けた――。

「うわああー」

「大介、しっかりして！」

ん？ お母さん？

「大介、やっと目が覚めたのね！ 二日間も寝てたのよ！」

「えっ、二日間も!?」

「そうよ。心配したんだから」

「犬は？」

「この家に犬なんかいないわよ」

ベラ、消えたんだ……。ベラ、ありがとう……。

次の日の朝……。ぼくは自分から、ボスにあいさつをすると決めた。あつ、ボスが来た！

「おはよう！」

「おう、大介おはよう。もう、体は大丈夫なのか？ 心配したんだ……。今まで、いじめたりしてごめんな」

「大丈夫。ありがとう。これからは仲良くしような！」

今日は、ボスと仲良くなれた記念日であることをちかつた。

それから何ヶ月間たった今でも、ボスとぼくは仲良しだ。この頃、ずっと毎日
日が楽しい。

そして……ベラありがとう。この気持ちかべらに届くといいな。

ゆうれい相談所

各務原市立蘇原第一小学校

六年

木村 優貴
きむら ゆうき

横山 亜美
よこやま あみ

野村友理奈
のむら ゆりな

←

敦賀市立栗野小学校

六年

田村 彩華
たむら あやか

「はい、桜ちゃん、ちょっと痛いよー」

ギリリと光るすごい注射針が、私のうでを目がけてプツリッ！

「うっ、ううー」

私は、あまりの痛さに目がうるみました。

「お姉ちゃんのくせに、泣いてるー」

横で、弟の春樹が笑っています。

私は桜。弱虫で生まれつき足が不自由で、いつもベッドにねたきりです。それにひきかえ、弟の春樹は、強くてスポーツ万能。こんな正反対な姉弟でも、すごく仲良しです。春樹は学校が終わると、毎日私のいる病院に来て、学校の話をしたり、一緒に遊んだりしてくれます。

今日はトランプのばばぬきをしました。

「わあ、ばばひいちゃったよおー」

「はははは。ざまあ見ろ」

二人でわいわいはしゃいでいると……。

《ねえ〜ねえ〜》

どこからともなく男の子の声が……。

「ん？」

「うわああー」

春樹がおどろいて声のする方を見てみると……。

そこには、なんと、窓をノックする小さな男の子が……。

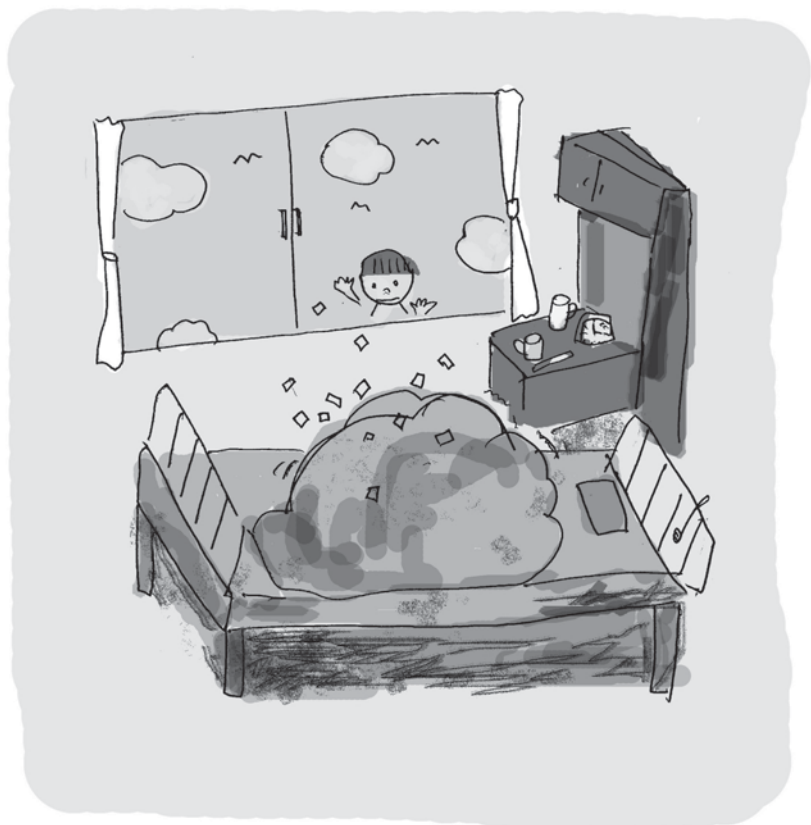
ここは九階です。窓には、手すりや足場がなくて、窓からのぞけるわけがありません。

私と春樹は怖くなり、トランプを投げ捨てて、ふとんにもぐりこみました。

(あれは、ゆうれい……!!)

そう確信しました。その時、

《怖がらないで〜》



と、さびしそうな声がしました。おそるおそる窓を見ると、男の子が、悲しそうな顔をして部屋の中を見ていました。

「あ、あんた誰？」

強がりの春樹は、ふるえながらも声をかけました。すると、男の子はパアツと明るい顔になりました。

《僕は、ひろと。この前、この病院で死んじゃったんだ。ぼく、死んでからずっと、ママを見てたんだ。そしたらね、いつも夜になると泣いてるの。だからお願い。ぼくが最後に描いた絵をママに届けてよ》

そう言われて、一しゅん私はとまどいました。

「絵はどこにあるの？」

《うーんとねー、たしか……あつ、そこだ》

ひろと君は、ベッドを指さしました。

「ハハハ。」

そこはいつも私がねているベッドです。シーツをめくつても、まくらをどけても、何も出てきません。

「ないよ」

《ちがうよ。ベッドの下》

あちこちさがしても、見当たりません。

《もう、ほくがさがすよ。窓を開けて》

「え？」

《いいから開けてよ》

ガラッ。窓を開けると……。

フワッ。生温かい春の風とともに、軽そうな体がまい降りました。

《もー、分からないの？ ここだよ。ここ、ここ》

ベッドのうらの鉄のパイプとパイプの間に、一枚の白い紙がはさまっています。引っこぬいて、広げてみると、色とりどりの絵が描かれていました。

《へへっ、すごいでしょ》

ひろと君は、てれくさそうに言っています。

《これが、ママ。これが、パパ》

「へえ、絵がじょうずだね」

話している間にどんどん時間が過ぎていきました。

「あっ、もうこんな時間」

春樹は、あわててランドセルを背負いました。

「じゃあ、明日、誰かに届けてもらうね」

《えー！ ヤッター。ありがとう》

次の日、看護師さんに事情を説明して、絵を届けてもらうことにしました。ただ、『ゆうれいが見える』という事は、誰も信じてくれませんでした。

この間、看護師さんが食事を持って来てくれた時も、私のとなりに、ひろと君がいたのに、看護師さんは気付かないまま部屋から出て行ったし……。

二、三日して、ひろと君のお母さんから手紙が届きました。

『こんにちは。とつ然死んだひろとの絵が送られてきて、びっくりしました。しかし、一目見て、すぐ本人の絵だと分かりました。本当にありがとうございます。うれしかったです。』

ひろとの母より』

「良かったね。ひろと君」

《うん！ ありがとう！ お姉ちゃん、春樹君》

そして、温かい風に乗って、ひろと君は消えていきました。

こんな事があってから、私達姉弟のもとには、次々とゆうれい達が相談にやってくるようになったのです。★

この前は、おじいさんが、この病院に入院しているおばあさんに会いに来ました。昨日は、女の子が来ました。今日も、また明日も来るでしょう。そして、この病室はゆうれい達から「ゆうれい相談所」と呼ばれるようになり、私と春樹は、毎日ゆうれいが来るのを楽しみにしていました。

でも、それから一週間ぐらいたったある日、その様子を看護師さん達に見られたせいで、私達はがけつぷちに立たされてしまいました。見られたと言っても、ゆうれいの姿も声も何も分からないので、私達が空気に向かってしゃべって笑っているようにしか見えません。そうすると、私達は頭がおかしくなっているとかわれてしまいます。そこで、私達姉弟は、もうゆうれいと会わない決心をしました。

そして、数日が過ぎました。

《ここはゆうれい相談所?》

男の子のゆうれいが来ました。

「ゆうれいめ、もどれ。今すぐだ。もう二度と来るな。他のゆうれいにも言うておけ」

「ちよっと春樹、それ、言い過ぎじゃないの?」

《分かったよ、帰る》

ゆうれいは、さびしそうに消えていきました。

「あのぐらいは言っとかないとね」

「そうかな……」

「あつ、お姉ちゃん、宿題教えてよ」

「はいはい」

私は、ため息混じりに言いました。

うちの家は、お父さんもお母さんも働いていて、たまに私のところにおみま
いに来てくれます。お父さんもお母さんも別々に。二人の仲が悪いんです。いつ
しよにいれば、口げんかばかりで……。仲良くしてほしいものです。

十日ぐらいたって、その日は休みだし、のんびりしようと思ってました。

バン！

いきなりまどが開いて、あのととき、「来るな」と言ったはずの男の子が入っ
てきました。

「おまえ、二度と来るなと言っただろう」

「春樹、一回聞いてみよう。二回も『来るな』って言われに来るなんて、ゆうれいでもないよ」

話を聞くと、男の子の名前は『悠』。その悠くんは、死ぬまでお母さんとお父さんの仲が悪くて、今もそうだったら仲直りさせたい、という話でした。自分達とにいて、びっくりしていた私達ですが、手伝うことになると思うはりきっていました。

「それで、解決策はあるの？」

《うん、ぼく手紙を書いてきたし、これをポストに入れて送ろうよ》

「そんなの簡単すぎる。でも、手紙っていいかもね」

「春樹、ポストに入れといてね」

「もっちゃん」

三人で笑いました。でも、私は何か引つかかっている気がして、小さい声

でしか笑えませんでした。

手紙を出した次の日、悠くんのお父さんとお母さんから手紙が届きました。

『お手紙ありがとうございます。悠がそんなふうにも思っていたなんてびっくりしました。もうけんかはしません。悠も手紙を書くひまがあったら勉強しなさいよ。本当にありがとうございます。』
悠のお父さん、お母さんより

なぜか、見たことのあるような字だと感じました。

《よかったあ、ありがとうございます。春樹くん、桜ちゃん》

そう言った悠くんは、ゆっくりと消えていきました。笑いながら。それはまるで、私達はどうするのかをうかがっているかのように。

「ねえ、お姉ちゃん、ぼく達もやろうよ」

「お父さんとお母さんのこと？」

「お姉ちゃん、あったまいいい！」

「でも、夜にしかいないんじゃないの？ もしかして、病院を抜け出すつも

り？」

「そういうことだよ」

しばらく話して、明日の夜一時に病院を抜け出して、お母さん達を仲直りさせる、ということになりました。

そして、作戦実行日、一とき、ねむいときもあつたけど、看護師さんの前でねたふりをして、お互いねむりこまないように話をしていました。夜中の一時になると、私達は音を立てないように階下へ降りていきました。げんかんは閉まっていました。裏口が開いていたので、そこからそっと出て行きました。外に出ると、もうこんなにならねばならない必要はありません。家に向かって春樹は全力で車いすを押しします。

「やっと着いたあ」

家の中からは、予想どおりけんかの声が聞こえます。ガチャツと、ドアが開いて、お母さんが出て来ました。

「出て行きます」

「えっ、お母さん出て行くの？」

「そんなの、やだよ」

「なっ、なんで二人がこんなところに……。もしかして病院を抜け出してきたの？」

「そっ、そんなことよりお母さん出て行くの？」

「私達、二人のけんかを止めるために来たんだよ」

「出て行かないで」

私達は、泣いていました。泣くつもりはなかったのに泣きました。

「分かったよ。お母さん、出て行かない」

「本当に？」

「それじゃあ、みんなに謝ってよ。私達とお父さんとおじいちゃんに」

「おじいちゃんも？」

「いいから早く」

「うん、そうだね。春樹、桜、心配かけてごめんね。そして、お父さん、ごめんなさい」

「いや、こっちも悪かった」

「そして、おじいちゃん、この子達のお世話でもしたの？　こんな桜はじめてだよ。まあ、いろいろごめんなさい」

お父さんとお母さんは、空を見上げて言いました。

「お姉ちゃん、なんでおじいちゃん？」

「春樹、まだ分らないの？　おじいちゃんの名前は？」

「えっと確か……『悠』。えっ。お姉ちゃん、もしかしてあの男の子」

「そうだよ、きつとね。だから、私達もお礼を言わないとね」

「ありがとう」

春樹は、その言葉の意味がはじめて分かりました。

ラッシー国のお姫様 星那

各務原市立中央小学校

六年

藤村ひかる

本島萌々花

五島結那

←

敦賀市立咸新小学校

六年

一川萌乃香

積優美香

「もう無理！ ねむい……」

私は、紙を丸めてゴミ箱に投げ捨てた。

今日の宿題は物語を書く事。でも、思うように書けない……気付いたら、もう十一時半、鉛筆を持つのが苦になってくる。

「星那、まだ書けてないの」

お母さんがおこつて言った。提出期限は明日。早く書かないと……。

「姫様、姫様、ひめさま！」

聞いたことがない声。『ひめさま』ってだれのことだろう。

「ここはどこなの」

「何をおっしゃる姫様。ここはラッシー国、あなたはここの姫様じゃありませんか!!」

「ラッシー国の姫様ですって!？」

ラッシー国のお姫様 星那



我に返って周りを見わたした。

どうやら、ここはお城の中らしい。家来みたいな人がたくさんいて、私を囲んでいた。まだ、この人達の言っている事が分からない。確か、作文を書いている最中にねてしまつて……気付いたらここにいますか？

「姫様、そろそろお食事の時間ですぞ。さあ、さあ、こちらへ」

「ちよつと待つてよ。先に行つてて」

ボタン！

（やつと出て行つたよ。よし、ここからどうやつてぬけ出そうか……城の地図は……と）

本棚を見ていたら、気になる物を見つけた。

『小人のための小人大全集』

「なんじゃこりゃ。変なの」

そこへ、家来が入ってきた。

「姫様、早くしてくださいよ。食事が冷めてしまいますぞ」

「あらためて聞きたいのだが……ここは小人の国なのか」

「ええ、その通りでございます姫様。そんな今さら聞かなくても……」

「ええー!?」

今、私の身に起きていることを整理すると、まず、ラッシー国という小人の住む国にいる。しかも、その国の姫様なのだ。ということは、私の体も小さくなっている。窓の外を見ると、大きな足がズドーン、ズドーンと音を立てて動いているではないか。

「朝食はいらないから、この城から出たいのだが……」

「姫様、外は大きな人間がうじゃうじゃいて、大変危険ですぞ」

「じゃあ、大きくなる方法はないのか?」

「そんなこと、私知っていますわけありませんぞ。とにかく……」

「もういい。出ていってくれ」

(さあ、『小人大全集』を見てみよう)

『 目次

一、小人の生き方 三ページ

二、小人の心得 十ページ

三、小人のひみつの呪文 二十五ページ 』

(呪文ってなんだろう?)

私は二十五ページを開いた。

『大きくなる呪文―黄金のマンゴーを食べながら「ビッグアルフォンリ」と、三回唱える。すると、巨人のようにビッグになれるよ』

「これだあー!! ……でも、黄金のマンゴーって、どこにあるの?」

私は首をかしげた。すると、ひらっと一枚の紙が落ちた。

なんとそれは……黄金のマンゴーのありかを示す地図だった。★

私は、その地図をよく見た。すると、黄金のマンゴーのありかが小さく書か

れてあるではないか！

『ラッシー国の中で一番高い山、ダルシャ山の頂上に一本だけ、黄金のマンゴーがなる木があるよ』

「ダルシャ山？ ラッシー国の中で、一番高いの？ ……そうか！ 家来に聞いてみよう！」

そこで私は部屋を出た。

けれど、ここは全然知らない国の、全然知らないお城。部屋を出たって、どこに行けば家来に会えるのかなんて分からなかった。そこで私は、辺りを見回してみた。すると、壁に赤いボタンがあった。ボタンの上には、注意事項が書いてあった。

「なになに……『お姫様以外使用禁止！』だって。けど私は、お姫様だから押しでもいいのかな」

私は勢いよくボタンを押ししてみる。すると、ジリジリジリ〜！ と大きな音

でベルが鳴った。あわてて走ってくる音が聞こえた。それは家来だった。

「姫様、姫様、どうしたのですか？ 緊急お呼び出しボタンを押されました」

「ええ〜!? これってそんなボタンだったの!? ……まあ、聞きたいことがあったので、ボタンを押したんだ。あの……ダルシャ山ってどこにあるのだけ？」

「ダルシャ山！ ラッシー国の一番北にある高い山ですが、それがどうかしたのですか？」

「私、今からそこに行ってくる！」

「ダメですよ、姫様！ 外は危ないし、ダルシャ山にはこわい猛獣などがたくさんいるのですから」

私はすごく悩んだ。ダルシャ山に登れないんだったら、人間に戻れない…。

「家来！ 黄金のマンゴーって、知っておるか？」

「はあ、知っておりますが……。ダルシャ山の頂上に一本。あとこのお城の庭に一本生えておりますが……。このお城のマンゴーは、アルコール度数がとて

も強いので、十八才以上でないと食べられないのです」

私は今、十一才……。お城のものは食べられないのか……。やっぱり、ダルシャ山に行くしかないか！

私は、お城を飛び出した。しばらく歩いていると、王子様が馬に乗って通りかかった。

「これは姫様。何をしてらっしゃるのですか？」

「今からダルシャ山の頂上に行きたいのですが、道が分からないのです」

「そうですか。ここは人間どもがうじゃうじゃしていて、大変危険です。私が送って差し上げましょう」

私は、王子様の馬に乗った。タカッタカツと走っていき、しばらくすると、ヒーンといかないた。

「姫様、到着しましたよ。ここがダルシャ山です。それでは気をつけて行ってらっしゃいませ」

「ありがとう」

と言うと、私は馬から下りダルシャ山に向かった。

険しい道を乗り越えて、どんどん登っていくと、目の前に不思議な猫のような妖精が立っていた。

「おお。これはこれは、ラッシー国の姫様ではないですか。どこに行かれるのですか」

「この山の頂上よ」

「えーっ、危ないですよ！ ここから先は、アバーラ珍獣がいます。目をつけられると、食べられてしまいますよ」

すると突然、シャーシャーと大きな猛獣が追いかけてきた。

「姫様！ 私の背中にお乗りくださいませ！」

私は妖精の背中に乗った。すると大きな羽を広げ、バタバタと飛んでいるではないか。猫って、この国じゃあ飛ぶのね。

一気に頂上に着き、私はお礼を言ってから黄金のマンゴーに向かつて走っていった。そしてマンゴーを手に取り思い出した。確か呪文を三回唱えなければいけないんだっけ！

私は黄金のマンゴーを一口食べて、「ビッグアルフォンリ、ビッグアルフォンリ、ビッグアルフォンリ」と唱えた。すると、パアッと光が私をおおった。

「星那、星那！ 早く起きなさい！ まだ寝てるの？」

はあ、あれ、作文は？ と思いながら机を見た。すると、夢に出てきた物事のすべてが作文に書かれているではないか！

「お母さん、私、昨日作文を書き終わったっけ？」

「はあ？ 何ねぼけてるの。あなたは昨日、書き終わってから寝たんじゃ？」

恐怖はとつぜんに……

各務原市立尾崎小学校

五年

東軒

未紗

本橋

知歩

細田瑛麗奈

←

敦賀市立粟野南小学校

六年

芝井

琴音

瀧

蒼馬

縄手

小夏

森山

葵

「みなさん、明日から夏休みです。病気や事故に気をつけてくださいね」

「はい」

先生の言葉に、レイナたちが元気よく返事をした。

夢原レイナは小学校五年生。待ちに待った夏休みが明日から始まるのだ。そして、第一日目の明日から、レイナたち仲良し五人組はキャンプに出かける計画をしていた。

学校を終えたレイナが帰宅してまもなく、家の電話が鳴った。

「はい、夢原です」

電話をかけてきたのは、大島カイトだった。

「明日からのキャンプについて、これからみんなが集まって打ち合わせをしようよ」

「うん。他のみんなには私が電話をかけておくね」

三十分後、レイナの家には仲良し五人組が集合した。

雪白ユメハ。

櫻木カケル。

藤原ラン。

そして、カイトとレイナの合計五人だ。

「行き先は予定通り、美島海岸。明日の朝七時、美島駅の前に集合だよ。持ち物は水着、着がえ、弁当、お小づかい、おかしだね」

レイナたちの町から電車で三十分ほどの美島海岸には、カイトのおばあちゃんやんがやっている民宿があつて、そこにとめてもらうことになっていた。子どもたちだけでの初めてののちよつとした旅行だから、五人ともワクワクしていた。

レイナはその夜、楽しみでなかなかねむれなかった。

「おはよう」

「おはよう」

いよいよ楽しみにしていたキャンプの当日だ。

五人で電車に乗って三十分。さらに十分ほど歩くと、カイトのおばあちゃんの民宿が見えてきた。おばあちゃんにあいさつをし、荷物を置いて休けいした。

「ねえ、せっかくだから探険に行こうよ」

とつ然のカケルの提案にみんなはおどろいたが、知らない土地での探険なんておもしろそうだ。

「いいね。行ってみようよ」

みんな口々に賛成した。

五人は近くの森に出かけ、探険を始めた。木々が生いしげる中を進んでいくと、カブトムシ、チョウ、セミ、いろいろな虫がいた。

探険の途中、ユメハが、

「夜になったら『きもだめし』をしようよ」と言った。

レイナは内心こわかったが、他の四人がやる気まんまんの様子だったので、しかたなくみんなの決定にしたがうことにした。

日がくれて、夜になった。五人はカイトの案内で近くの墓地へと出かけた。昼間とはちがうひんやりとした空気に、何かが起こりそうな予感がした。

「じゃ、出発するぞ」

「うん」

カイトを先頭に五人が出発した。たよりになるのは、カイトが持っているかい中電灯の明かりだけだ。

「何か出たら、どうしよう」

レイナが言うと、

「出るわけないさ。おばけなんて本や映画の中の話じゃないか」

と、カケルが答える。だけど、そういうカケルの声も何だかひきつっている。

恐怖はとつぜんに……



「わあっ！」

カイトが大声を出した。レイナたちをおどろかせようと、わざと何かが出たような声を出したのだ。レイナたちはこしをぬかすほどおどろいた。

「もう、びっくりさせないでよ。人が悪いなあ！」

レイナたちが口々に言ったその時、カケルがぼそりと言った。

「ランがないよ」

列の一番後ろにいたはずのランが、消えていた。★

「ラーン、どこー？」

みんなは口々にさげんだ。だが返事はない。カケルの時計が九時を過ぎた頃だった。そのときユメハは小さな悲鳴が聞こえたような気がした。

「今、何か聞こえなかった？」

「え？ 何も聞こえなかったよ」

みんなが言い合っているうちに、悲鳴がみんなに聞こえた。

「今の悲鳴、ランの声に似てなかった？」

レイナが言った。みんながうなづく。

「どこから聞こえた？」

このあたりの地理にくわしいカイトにカケルが言った。

「この近くにお屋敷があるんだ。でも、その主人が亡くなってから、もうそこは使われていないらしい。しかも、その主人の亡霊が出るといううわさがあるんだ」

みんなはとても真剣な顔でその話を聞いていた。

「じゃあ、そのお屋敷にいったらどうしようと思った……。お屋敷

ユメハは言った。みんな亡霊が出たらどうしようと思っていた……。お屋敷に近づくと、まわりの景色が不気味になった。夜の森は静かすぎて怖かったが、みんな一言もしゃべらずに、もう一心に歩いていた。そして、ついにそのお屋敷についた。さすがに何年も使われていないだけあって、今にもくずれ

落ちそうだった。

「中に入ってみようよ」

そう言つて、カイトがドアの取っ手に手をかけてみたがびくともしない。

「全然開きそうもないよ。でも、みんなで引つ張ったら開くかもしれないよ」

そう言つて、みんなで引つ張ったがやはりだめだった。みんながあきらめかけていたその時だった。お屋敷の裏からランの声がした。急いでお屋敷の裏に行くと、もう一つ、さつきよりも新しいドアがあった。

「たぶんこの先にランがいるんじゃないかなあ」

レイナが言った。ドアを開けてみると、中はうす暗く、地下まで続くらせん階段があった。みんなでらせん階段を下りていくと、その先には一つの部屋があった。

「この先にランがいるんじゃない？」

みんなの期待がふくらむ中、カイトはドアを開けようとした。しかし、かた

くて開かない。

「またー」

みんなは言った。その時、「チャリーン、チャリン」とかぎの音が聞こえたと思うとだれかが階段を下りてきた。

「亡霊だー」

レイナが大声で叫んだ。みんなはレイナの口をおさえてとめようとしたが遅かった。足音がすばやくなった。見つかったのだ。ランみたいになってしまうんだと思っているうちに、足音がすぐそこまで来た。

「もうだめだ……」

するとなじみのあるやさしい声が出た。

「だいじょうぶ？」

みんなはいっせいに顔を上げた。そこには、いつものランがいた。

「ラン、無事だったんだね」

「どうして悲鳴を上げたり、かぎの音がしたの？」

レイナが言った。

「あのね、みんなをおどろかせようと思ったらはぐれてしまったの。お屋敷に着くまでに、風の音が人の声に聞こえたりして思わず悲鳴を上げてしまったの。かぎみたいなのは、ポケットに入っていたジュースのおつりじゃないかな」

「なーんだ。びっくりした」

ほっとした五人はそろって民宿に帰った。

スタート

各務原市立那加第二小学校

六年

新田 七海

安田 光佑

清松 綾乃

←

敦賀市立敦賀北小学校

六年

増井 大士

柴田 大樹

土岐 洗太郎

余座 海里

こんにちは。ぼくの名は竜太。

毎日ふつうに学校に行き、ふつうの生活をしていた。その日も、

(今日の晩飯は何かなあー)

と考えながら、ベッドの上にねころんだ……。

「おーい、早く起きなさいよ!!」

その声で、ぼくは目をこすりながら起きた。いつの間にかねむってしまったらしい。まくらもとに、長刀を持った見覚えのない女の子がいた。目が覚めたばかりで気が付かなかったけれど、ここはぼくの家じゃない。

周りを見ると、家は木でできていると思ったら同時に、女の子が、

「なに、ボケーっとしてんのよ? さっさと手伝ってよ」

と、命令口調で言った。

まずは、女の子の名前を聞くことにしよう。怒られそうだけどね……。

「お前、名前は何？」

「はあ!? 私の名前、知らないの? 私は沙夜! 二度と聞かないでね!!」

(ああ、やつぱり怒られた。まあいいか。で、ここは何時代!? 服装からして江戸時代くらいなのか? まあとりあえず、外に出てみよう)

家の外には、ぼくより少し背が高い女の人がいた。

(だれだろう?)

「あの、あなたの名前は何ですか？」

「私の名前はね、木村佳与。名探偵よ」

名探偵というところを強調したが、自分のことを名探偵って言うなんて不思議だな……。

「あなたが名探偵という証拠はあるんですか？」
と聞いてみると、即、答えが返ってきた。

「ええ、いろいろあるわ。例えば……」

説明が長くなりそうなので、ぼくは話を止めさせた。すると、急に、

「佳与さん、助けてー！」

と、戸口の方からさけび声がした。

佳与さんが戸口の方へ走って行ったので、ぼくもついて行くことにした。

ぼくは、ふと思った。

(なぜ、こんな時代にぼくは来たのだろうか？　そして、ここは一体どこなのだろう……。声の主は沙夜だ。さっき起こされた時とは感じが違うような気がする……。まあいい、いや、本当にいいのか？)

そんなぼくにおかまいなしに、沙夜は話し始めた。

「ゲタをぬすまれたの」

(へえ。それで沙夜は裸足なのか……)

「どういう事!？」

佳与さんがたずねた。

「家の中で草双紙くさそうしを読んでいたの。そしたら、私のゲタが無くなっていたの。物音も何も聞こえなかったわ」

沙夜が言った。

（草双紙って、本の事だよね……）

「本当に物音はしていないんだね」

佳与さんが聞いた。

「うん。集中して読んでいたから、聞こえなかった」

沙夜が答える。

「ふううん……ありがとうね。話を聞かせてくれて」

佳与さんが言った。

「えっ、もうわかったの？」

と、沙夜は目を輝かせたけれど、

「いいや、まだまだよ」

と、一言で打ち消された。

それから、ぼくは佳与さんの家で寝泊まりする事になった。

時々、沙夜の家に行くと、そこはすごい光景だった。あまり広くないゆかの八割は本じゃなくて草双紙でうめつくされていて、あとの二割には「ベッド」と書かれた箱がぽつんと置かれてあり、豚や鳥もいる……。一言で言うなら、ぐちゃぐちゃ以上!!

それに、使った茶わんがあちらこちらに置きっぱなしだ。空き時間はダラダラするか、本（もちろん!! 草双紙の事だよ）を読むかの生活をしていた。

（毎日こんな生活を続けているなんて、信じられない!!）

一週間後、佳与さんが言った。

「もうそろそろ行こうか」

「えっ、どこに？」

スタート



急に言われて、ぼくはびっくりした。

「沙夜ちゃんの所よ。もうそろそろ行かないとね」

ぼくたちは沙夜の家に行った。もう、みんなそろっている……。

「さて——」

いよいよ、名探偵、木村佳与が動き始める……。★

その後、ぼくと佳与さんは事件現場、沙夜の家戸口に向かった。佳与さんが、そこに落ちていた何かを拾い上げる。それは、何かの糸のようなものだった。

「これは！」

その場にいる全員が口をそろえた。糸のようなもの——それは、白い動物の毛だった。それを見て、沙夜が小さな声をあげた。

「あっ」

「どうしたの？」

佳与さんがたずねた。

「たしか家の裏に、ネコがいたような……」

それを聞いて、佳与さんが走り出した。ぼくたちも急いで後を追いかけた。佳与さんが向かったのは、もちろん沙夜の家の中だ。

するとそこには、真っ白なネコが、ぼくたちに背中を向けて座っていた。

「待ってたニヤ」

「ネ、ネコがしゃべった！」

ぼくがさけぶと、沙夜は、

「何言ってるの。ただ、ネコが鳴いただけじゃないの」

と、バカにしたように言った。佳与さんも、あきれたような顔をしている。ど

うやら、白いネコの声はぼくにしか聞こえないらしい。

(どうしてだろう?)

不思議に思っていると、白いネコがぼくたちの方へとふり返った。

「あっ、あれ！」

沙夜がさげんだ。その白いネコは、ゲタをくわえていた。

「これで、事件は解決ね」

佳与さんが頭をなでると、白いネコはくわえていたゲタを簡単に放した。佳与さんはそのゲタを取ると、沙夜にわたした。沙夜はうれしそうに、

「ありがとう、佳与さん。やっぱり佳与さんは、名探偵ね！」

と言った。でも、ぼくはすっきりしない気持ちだった。

（これで事件は解決——したんだろうか？　こんなに簡単に？）

「竜太ニヤ」

「うるさいな！」

（しまった……）

「うるさいって、何よ！」

「いや、ネコが……」

「また言ってる！　ネコがしゃべるわけじゃない！　行こう、佳与さん！」

ああ、やっぱり怒られた。沙夜は佳与さんの手を引っ張って、家の中に入ってしまった。

「竜太ニャ」

ぼくの名前を知らないはずなのに、また白いネコがぼくを呼んだ。

「何でぼくの名前を知ってるんだよ！」

「ぼくちゃんは超能力者、いや超能力ネコなのニャ。人が考えていることを読み取ったり、タイムスリップをしたり——。とにかくいろいろなことができるのニャ」

(ほんとにネコなのかな……)

「今、ほんとにネコなのかな、と思ったニャ？」

「えっ？」

「だから、超能力ネコだと言ったニャ。竜太の考えなんて、すぐに分かるんだニャ」

白いネコは、うれしそうに言った。

「ぼくちゃんが、竜太をここに呼んだんだニヤ」

「……なんで？」

白いネコが、笑ったように見えた。

「竜太、夢は何だニヤ？」

——夢？

「ぼくちゃんが竜太を呼んだのは、竜太に夢を持ってほしかったからニヤ」

白いネコがそう言った。ぼくは、自分の夢を考えた。

——ぼくの夢は、何だろう？

そのとき、頭にうかんだのは、佳与さんだった。

「ぼくは……佳与さんをこえる探偵になりたい」

白いネコが、うれしそうに笑った。

「じゃあ、帰るニヤ」

そう聞こえてから、何も見えなくなった。

「竜太、ご飯よー！」

目を開くと、ぼくの部屋のベッドの上だった。どうやら、現代にもどってきたようだ。

「今日のご飯は何かニャ」

いつの間にか、となりにはあの白いネコがいた。

「……ついてきてたのか」

ぼくは、白いネコの頭をそつとなでた。ぼくはこれから、夢に向かって進んでいく。

いよいよ、名探偵、木村竜太も動き始める……。

八月三十一日に

各務原市立稲羽東小学校

六年

杉野 すぎの
浜田 はまた

有沙 ありさ
祐菜 ゆうな

←

敦賀市立中郷小学校

六年

池田 いけだ
武生 たけふ

礼寧 れいね
朋佳 ともか

八月三十一日に

憂鬱な気分。

地球が減んでしまえばよいと思うのは、こんな時のことを言うのだろう。

今日は八月三十一日。世間で言う、夏休み最後の日。そんな日が誕生日である私、仲沙希杏は、最悪な気分だった。

何故なら、宿題が終わらなかったから。

ドリル勉強は一文字も触れていないし、朝顔の観察だって、一日で終わるものじゃない。やったのは、自由研究ただ一つ。本当に今日が自分の生まれた日だなんて、ついてないな、私……。

そう思いながら、一昨日切ったばかりの緑髪をいじり、ドリルとにらめっこ。ノートをめくったら、急にやる気が無くなった。

「どうせ終わらないし、遊びに行こっ！」

そう言って、シャープペンシルをカタンと置いた。お気に入りのサンダルをはいて、外へ出た。

……母さんが怒っていたのは、言うまでもない。

外へ出ると、太陽が真上へのぼっていた。私の白いTシャツの上で、ピンクのспанコールがキラキラしている。

何となく道を歩いていたら、足下にサッカーボールが転がってきた。

「あつ！ それ、ボクのボール！」

私より背が低い男の子がこちらへと走ってきた。

「あ、これ？」

「うん！ ありがとう！」

「いえいえ、次は気をつけなよ」

「ありがとう！ キミって優しいんだね」

男の子はニコツと笑ってそう言った。正直、優しいなんて友達にも言ってもらったことが少ないから、嬉しかった。私は男の子に向かって軽く微笑んだ。

そしたら、急に宿題のことを思い出して、急ぎ足で家に帰った。

家に帰って、恐る恐るリビングのドアを開けた。

「たっ……たっ……」

すると、帰ってきた返事は、意外なものだった。

「あら、お帰り。今日は杏の誕生日だからって、ケーキをもらっちゃったのよ。食べる？」

「うん！ じゃあ、切つてくれる？ あ、私の分は大きい方ねっ！」

「はいはい。ほら、手を洗つてきなさい」

そう言われて、ニコニコしながら手を洗い、階段をかけた。そして音楽を聞きながらケーキを食べていると、急にめまいがして私は倒れてしまった。

目が覚めたら、何故か外にいた。しかも、家や木が小さく見える。

「あれっ、おかしいな……」

よく見ると、私はビルと同じくらい大きくなっていて。とてもビックリしたけれど、どこか嬉しかった。私が一歩歩くたびに地面が揺れる。

「楽しいっ！」

「あ！ キミ、あの時の！」

足下で声が微かに聞こえた。よく見ると、あのときの男の子だった。

「キミ……大きくなってるね。どうしてなの？」

「え？ ……うん。ケーキを食べたら、いつの間にかこうなっちゃった」

「ふーん。ボクも大きくなりたい……あ、そうだ！ キミの肩に乗せてよ！」

「ええ？」

私は意外な発言にビックリして、大きな声を出してしまった。男の子は呆れた顔をして、

「うるさいよ……」

と言った。かなりグサツときた。

「ゴ、ゴメン」

私が謝ると、男の子はニッコリして、

「うん、いいけど、早くキミの肩に乗せて！」

「ああ……、分かった、分かったあ」

そう言っつて男の子を持ち上げ、自分の肩に乗せた。

「すっごおい！ これでキャプテンに小さいなんて言われぬよ！」

「まあ、こんなに大きいもんね……」

（なるほど、サッカーをやっていたもんな）

と一人で納得していたら、いつの間にか私の足下にたくさんの子どもたちが…。

「いいなあ……俺も乗せて！」

「私も乗りたい！」

とワガママを言ってきた。私は、

「分かったよ！ 分かったから静かに、ね」

と言っつて、子どもたちを一人ずつ自分の肩や頭に乗せた。

（みんな楽しそうだし、たいして重くないからいいか）

と、思っていたら……。★

「こらー。何をしている？」

「やべっ、キャプテンだ」

と、肩に乗っていた男の子が言った。

「これっ、やるよ。ありがとな！」

そう言うや否や青い貝を一つ手に押し付けて下りた。というより、落ちた。そして逃げていく。

「あれが……。キャプテン？」

キャプテンは、確かに肩に乗っていた子達よりは大きい。

「何練習をサボっている。誰が許可した。早く練習に戻れ！」
と言ってから、私の顔をじっと見た。

「それと……。お前は何だ？　こくらじゃ見かけんな？」

「わ、私？」

急に質問されて、私はドキツとした。

「に、人間……」

「お前、馬鹿にしているだろ？」

「だって、私分からない。ケーキを食べていたらここに来ていたから……。ここはどこなの？」

「は？ 何だそれ。それに、体が大きいのってどういう事だあ！」

「……」

「それすら分からないのか？ っというか、お前が人間というのも怪しくなってきたぞ」

とキャプテンは言った。

キャプテンの目は好奇に満ちていた……。駄目だ、この人。私のこと、まるつきり信じていない。ただ、面白がって聞いていることは、馬鹿な私の頭でも分かった。

私が真剣に困っていることを、がんばって頭の固いキャプテンに話した。キャプテンは、疑いながらも私の必死さに免じてしぶしぶ信じてくれた。いわゆる『半信半疑』というものだ。

でも、話しているうちにいろいろな疑問が頭の中で回った。『本当に元の体に戻るのだろうか』とか『家に帰れるのだろうか?』とか……。

いつの間にか、私の頬をつたって文字どおり大粒の涙がこぼれていた。

「ど、どうしたんだ?」

「だって、だって、戻れなかったら……」

「フツ、そんな事か」

私は「そんな事って!」と怒鳴りたい気持ちを必死で抑えていた。すると、

「安心しろ。ここに体が大きくなった時用の薬草がある」

キャプテンが差し出した薬草はすっごくまずそうだった。

「えーっ」

八月三十一日に



と私は叫び声に近い声を出してしまった。っていうか、そんな時用の薬草があったことにびっくりだ。

「でも……な……」

体が元の大きさに戻るのなら都合がいい。だが、元より体が小さくなってしまったら……という考えが浮かんだ。私はその言葉をかき消すように首を横に振った。今は、こんな緊急事態だ。一か八かの勝負だ。

「どうした？ 元に戻りたくないのか？」

そう言ったキャプテンはうつすらと顔に笑みを浮かべている。

気に入くわない……。絶対この人、まだ信じていない……。

クツ……。仕方がない。元に戻る確率が〇・一％でもあるなら、それに頼るよりほかないだろう。

「た……食べるよ」

「いい覚悟だ」

改めて薬草を見ると、本当にまずそうだ。変に毒々しい色をしている。うつ、
気持ち悪くなってきた。

「どうした？ 今更怖気づいたのか？」

……ほんつとにこの人の言動にはいつもいつも、イラツとくる。

「……えいっ！」

まずい、思っていた以上にまずい。何か周りがぐらぐらとする……。

「あつ、本当に食べるんだ……」

そんな声を遠のく意識の中で聞いた気がする。本当に嫌な人だ。戻らなかつたら、一発殴ってやろうと思つた気もする。

《少しの間》

「うわあ！」

叫び声を上げて起きた私を待っていたのは……。

あれっ？ いつも匂い。安心できる温かな香り。

そう、普段の家の香り。

あれは夢だったのだろうか？ あの出来事全てが。その証拠に、私の机の上の時計は八月三十一日、しかもAM七時を指している。私は、ムツと顔をしかめた。どう考えても、あれが夢だったとは思えなかった。現に菓草の味やキャブテンの声がいっしょと舌&頭に残っている。

「さて、宿題どうするかな」

朝顔の観察は適当にするとして、ドリル勉強と作文は真面目にがんばりますか。そう思って、宿題に取り掛かろうとしたとき、

「杏、誕生日でしょ。早くケーキ食べよっ」

あつ、忘れていた。今日は私の誕生日だったんだっけ。シャーペンシルを持ちかけた手を止めて、あわててリビングに走っていく……ケーキで思い出しそうな事がありそうだった。なんだかあまり思い出したくない気がする。

「ケーーーーキーーーー」

八月三十一日に

私はケーキを夢中で食べた。とても甘くて、溶けそうに美味しくて……。どこかの薬草なんかとは全然違った。

「よーし。宿題がんばるかあ」

そう言ってあとは一日中勉強机に張り付いていた。今日が誕生日であることも忘れようと思った……。

《翌日 学校にて》

「へえ、○△小ってここなのか」

キーンコーンカーンコーン♪

チャイムが鳴ると、「宿題終わった？」だの「今日の朝、スツゲーだるい」だの、そういった声が全てなくなる、一時間目の前のホームルーム。

「……だるい」

そう呟く私はもうお疲れ気味だ。なんせ夜遅くまで宿題をしていたのだから……。

「——ということ——引っ越して——」

すごく遠くで先生が話している気がする。かろうじて聞き取れたのは「引っ越し」という単語だけ……。まあ、私には関係ないことだから。……眠い。何で夏休み明けいきなり学校に行かなくてはならないのだろう。

……けだるい。決定的に血糖値が足りない……。

「伊吹風介です。ヨロシク」

あれ、あの声聞いたことがあ……。

あいつつ……。キャプテ——。

「じゃあ伊吹君は、仲沙希さんのとなりの席ね」

えっ、私！

その時、伊吹君と目が合った。

「ヨロシク」

そういつて浮かべた微笑には、確かに見覚えがあった。

一冊の白い本

各務原市立各務小学校

六年

今井

千尋

早川

佳澄

小倉

颯

←

敦賀市立中央小学校

六年

高縄

莉子

宮口

彩希

これは、夏休みに起きた出来事……。

「おい、光！ 早く来い！」

「ごめん、ごめん。待ってた？ 秋人」

ぼくの名前は、光。絵が大好きな六年生。

「たくう、光がさそつたんだろ。ルールはちゃんと守れよ」

彼は秋人、学年一の秀才。ぼくの親友。

「何で遅れたのか言ってみろ」

「うん。実は……本を拾ったんだ」

と言つて、ぼくは本を秋人に見せた。

「へえー、えっ？」

ペラペラ……。秋人は口をぽっかりと開けている。

無理もない。道ばたで拾った本は、ページをめくっても絵も文字も一つも書いていないからだ。

とつ然、本がピカッと光り、ぼくたちはいきなり本の中に飲みこまれてしまった。

「ううつ、何だここは？」

そこは、辺り一面、真っ白な世界だった。そして、ぼくの手には見覚えのない羽ペンが……。

「何、この羽ペン？ さっきまで持ってなかったのに」

「羽ペンじゃない！ 筆神様じゃ」

「羽ペンがしゃべった！」

ぼくと秋人は、思わず声を上げた。しゃべる羽ペンなんてあるのか……。

「そこの二人、わしの使い方を知りたいか？」
と、筆神様が聞いてきた。

（まあ、知りたいけど）

と言おうとした時、秋人が、

「知りたくねーよ、羽ペン！」

「羽ペンじゃない！ 筆神様じゃ。しかたがない。わしが強制的に教えてやろう。まずは……」

と言つて二十分の長い説明を聞かされた。

「ここはどういう世界なんだろう？」

ぼくが言った瞬間、狼の大群がぼくたちをおそつてきた。

「早く逃げないと！」

「よし、筆神様の力を使おう」

筆神様は特しゆな力があつて、書いた物を実現させることができる。そして、書いた後に特徴を書けば、その通りになるといふ。

「よし、大きな鳥に乗つて、どこか遠くまで逃げよう」

そう言つてぼくは、スケッチブックに鳥の絵を書き、『けっこう大きい』と

特徴を書いた。すると、ボンツという音とともに、大きな鳥が現れた。

「よし、この鳥に乗って逃げるぞ！」

「待って、秋人。この鳥に名前をつけないと」

「何言ってるんだよ。『フィー』でいいだろ」

「ナイス！ いい名前だね」

ぼくと秋人は、フィーに乗って遠くの方へと飛んで行った。

「ここまで来れば、さすがに追いかけてこないだろう」

ぼくたちがホツとしていると、近くで物音がした。

「オイオイ、次は何だよ」

すると、今度は、髪が少し長めの男の子が現れた。

「だれだ、お前は？」

ぼくたちは言った。

「おれのことか。おれは、遊也。あるヤツに追われてるんだ」

「あるヤツつてだれだ？」

「あそこにあるマツタケだ」

「ただのキノコじゃん」

その時、いきなりマツタケに手や足がはえてきて、こちらに向かって来た。

「これって、やばい展開じゃない？」

遊也が逃げ出した。

「早く来い！ やばい、そいつにつかまったら、体全体にキノコがはえてくる

ぞ!!」

(なんで知ってるんだ？ この人はもしかや……)

ぼくたちは、キノコから何とか逃げ切った。

「ハア、ハア……、ちよつと聞いていいか？ お前って、何者だ？」

「フウ、おれはなあ、この国の主だ!!」

「えっ、そうなの!？」



ぼくたちはおどろいた。まさか遊也がこの国の主だなんて。

「じゃあ、遊也はこの国から出る方法を知ってるってこと?」

「まあ……そうなるな」

ぼくたちは顔を見合わせた。

「よっしゃあ。じゃあ、遊也。元の国へもどしてくれ」

「それは、急には無理だ。もどるには、時の砂が必要だ」

「そんな……」

ぼくたちの冒険が始まった。★

「冒険の前に一つ言っておく。時の砂はカプセルに入っていてめったに見つからない。だから二人でがんばって探してくれ」

「そんなあ、見つからないよう」

「だけど、この国から出るにはこの方法しかない」

ぼくたちは顔を見合わせうなずいた。

「じゃあ、二人で時の砂を探してくるよ」

ぼくたちは遊也からつえをもらった。

「このつえは、相手をたおすことができる。ただし、このつえは一度しか使えないから考えて使ってくれ」

「分かった。考えて使うよ。ありがとう」

そう言って、ぼくたちはつえを持ち山へ探しに行った。

ぼくたちが山を歩いていると、草の中からガサゴソという音が聞こえてきた。草の中をのぞくと、大きなクマが木の実を食べていた。ぼくたちはびっくりして大きな声を出してにげた。その声に気づいたクマが追いかけてきた。

「このつえを使おう」

とぼくが言うと、秋人は、

「だめだよ。つえは一度しか使えないんだ。しっかり考えて使おう」

ぼくたちは悩んだ。

「じゃあ、木の実を向こうに置いて、クマの気をそらそう。そしてそのうちに逃げよう」

「そうしよう」

ぼくたちは木の実を集めてクマが通りそうな場所に並べた。すると、思った通りにクマが木の実を食べ始めた。そのうちにぼくたちはそうつと逃げた。やつとの思いで逃げて顔を合わせると、ぼくは、

「秋人のおかげでつえを使わずに逃げる事ができたんだよ。ありがとな」と、てれくさそうに言った。こうしてぼくたちの友情も深まった。

山の中を歩きながら、カプセルを探していると、目の前に突然海が広がった。急いで走っていくと木がたくさん落ちていた。その木を使っていかだを作り、海にでた。しばらくすると、下に黒い大きなかげが現れた。そのかげは次第に大きくなりサメが出てきた。びっくりしたぼくたちは、思わずつえを見た。

「サメには勝てないから、つえを使おうと思う。光はどう思う?」

「そうだね。つえを使おう」

ぼくたちはつえを持ってサメの方に向けた。すると、サメは遠くに逃げていつてしまった。

「もうつえは使えないね。これからどうしよう」

「つえは使えないけれど、きっとぼくたちだけでもカプセルは見つかるよ。さあ、行こう秋人」

砂浜に上がりカプセルを探した。

「あっ。海から何か流れてくるぞ」

ぼくたちは走った。秋人が流れてくる物を手に取ってみると、それは探していたカプセルで、中には時の砂らしい物が入っていた。ぼくたちは思わず顔を見合わせ、にこっと笑い合った。すると、向こうの方から遊也が走ってきた。

「君たち二人の冒険をずっと見ていたんだよ。よくがんばったな。つえを使う時のこともよく考えられたね。そのカプセルに入っている物が時の砂だよ。良

かったね。やっとこの国から出られるよ。時の砂をひとつまみ自分にかけて、この国から出られるんだよ」

ぼくたちは遊也にお礼を言った。

「この国から出る方法を教えてくれてありがとう。冒険はとても楽しかったよ。この冒険をして友情についてもわかったよ。じゃあ、そろそろ帰るね」

そう言うと、ぼくたちはひとつまみの時の砂を自分たちにくりかけた。

気が付くと、回りはもとの場所にもどっていた。驚いたことに、時間ももとのまま、全く進んでいなかった。

家に帰って家族に話すと、

「そんなことあるわけないよ」

と言われ、誰も信じてはくれなかった。

「やっぱりあの冒険は夢だったのかなあ」と、ぼくたちは話していた。

「でも、やっぱり信じられないな。もう一度あの場所に行ってみよう」
ぼくたちは遊也に出会った場所に行ってみた。すると、あのつえが落ちていた。

（やっぱり冒険は本当だったんだ。あの冒険のことは誰も信じてはくれないけれど、二人だけの大切な秘密さ）
と思うぼくと秋人だった。

それからもぼくと秋人はずっと仲良しだった。たまにあの冒険を思い出しながら遊んでいた。

桜の森のひみつ

各務原市立川島小学校

六年 田中

佑依

←

敦賀市立赤崎小学校

六年 和田

卓弥

「なあ、りようすけ。今度の日曜日、お前ももちろん行くよなあ」

「えっ」

「十時集合だからな。じゃあな」

ひろしは、そう言うと言ってしまった。

本当は行きたくないんだよな。でも、断れずに行くことになってしまった。

どうすればいいんだよ！

ひろしにさそわれて行くことになった場所は、『桜の森』。森の中心には大きな桜の木があって、毎年きれいな花を咲かせている。だけど、その周りには手入れされていない木がいっぱいあって、薄暗くて不気味なのだ。その上、ゴミもいっぱいあるから、誰も近づかない。でも、そんな場所なのに毎年美しい桜が咲くわけを、おじいちゃんから聞いたような……。

—ヨウセイが、あの桜を守っているからだよ—

今回、その森に行くことになったのは、あるウワサを聞いたからだ。

——あの森が、なくなるらしい。

「森がなくなってしまう前に、タンケンしに行こうぜ！」
そう言い出したのが、ひろしだった。

とうとう日曜日が来てしまった。ぼくが、いやいや集合場所に行くと、ひろしと、りんと、まいがいた。

「りようすけも来たし、出発！」

と、ひろしが威勢よく歩き始めた。

「ねえ、どこまで行くの」

「そりゃあ、桜の木までさ！」

ぼくは、遠くて怖くて、

(いやだ！)

と心の中でさげんだ。よけいに足どりが重たくなった。しかし、女子がいる手

前、逃げ出すこともできない。臆病者と思われるのはごめんだ。

森の中は、予想以上にゴミだらけだった。特に驚いたのは、ソファア、テレビ、冷蔵庫、車などの大きい物が、たくさん捨ててあったことだ。

「なに、このゴミの量！」

「本当にひどいわね」

「大丈夫！ ほく、ビニール袋、持ってきたから。ほらっ！」

ほくは、自信満々に言った。

「そんなのじゃ、入るわけないでしょ！」

まいにおこられた。

「でも、捨てる物は拾っていこうよ」

と言うひろしの一言で、みんなでゴミを拾いながら歩いた。

一時間ほど経っただろうか。

「ねえ、まだ着かないの」

「もう帰ろうよー」

まいとりんが言い出した。

「まだまだ行くよー」

と、元気なひろし。

「えー」

三人は、よけいに疲れてしまった。

その時、ものすごく強い風が吹いた。すると、辺りがまぶしくなって、四人は思わず目をつぶった。おそろおそろ目を開けてみると、

「あっ」

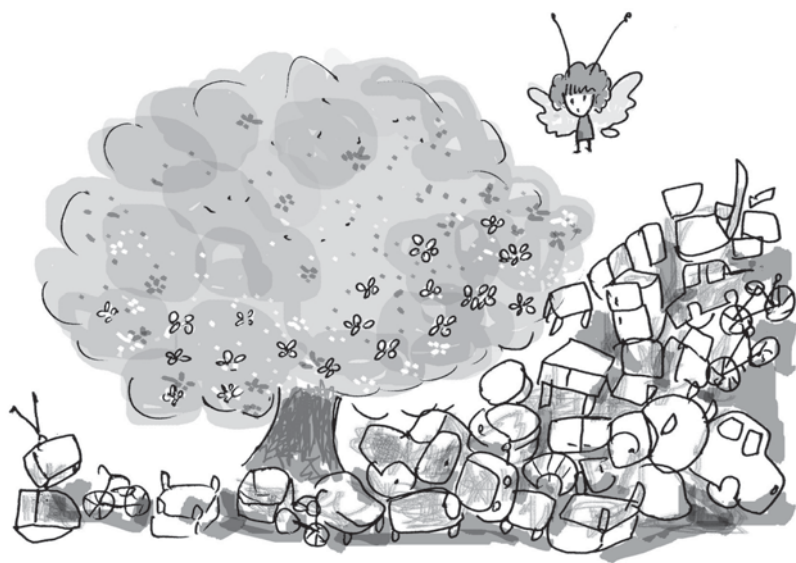
「すげえ」

「キレー」

みんな口々にさげんだ。

そこには、大きくてとても立派な桜の木が立っていた。その周りには、この森

桜の森のひみつ



とは思えないほどきれいだった。

四人は、桜の木に向かって走り出した。木の真下に着くと、りんがぼくの頭を指差しながら言った。

「なに、それ」

「ん？」

何気なく頭の上を見ると、小さな人間がいた。

「ギャー」

「ギャー」

「ギャハハハ」

ぼくたちは、同時にさげんでしまった。すると、その小さな人間が、

「私は、ヨウセイのりり。ヨロピク」

「うちは、ルル。よろしくな」

と、あいさつをしたのだ。みんなは、きよとんとしてしまった。

ぼくは、おじいちゃんが言っていた話は本当だったんだと驚いてしまった。

「うちらは、桜の木を守るヨウセイや。あんたらにお願いがあるんやけど」と、ルルが言った。ヨウセイのくせに関西弁だ。

「見ての通り、この森はゴミだらけになっているわ。だからこの桜の木は弱ってしまっているわ。私たちの力では、もう守りきれないの」

「ゴミを拾ってくれたあんたらなら、この森を守ることができると思うんや」「えっ。子どもの私たちにできるの?」

「大丈夫。あんたらなら、できる」

ヨウセイたちに強く言われて、ぼくたちはこの森のために何ができるのか、考えることにした。★

「なあ、どうするんだ?」

「森のゴミをもっとたくさん拾おうぜ! それに、まだまだゴミ袋がたくさんあるからさ、やろうよ」

そう言うと、ひろしは、ゴミ袋を持って森の奥の方へ行ってしまった。ぼくと、りんと、まいは、いやいやゴミを拾った。四人とも同じことを、三時間ずつとしていた。

「そろそろ帰ろうよ」

「そうだな、帰るか」

「それじゃまた、日曜日の十時に集合な」

ぼくは、またかと思いつながら帰った。

そして、また、日曜日がやって来た。ひろしも、まいも、りんもすでに来ていた。

「やっと集まったか」

四人は、ひろしのゴミ袋にゴミを入れ始めた。すると、いつのまにか、まわりには動物がたくさんいることに気がついた。シカや鳥がいた。

「ゴミを拾ったかいがあったな」

すると、また、小さな二人のヨウセイが現れた。

「あんたら、森のゴミを拾ってくれたんやな。ありがとな」

「ゴミを拾ってくれたおかげで、また、この森に立派な桜を咲かせることができるわ」

「この森を守ることができたで」

「まだ、ところどころにゴミがあるけど、こんなにもきれいになったらじゅうぶんよ」

「今回でこの森がなくなってしまうからな。ぜったいに桜に花を咲かせたかったんや」

「そうかあ、今回で最後なんだね」と、ひろしが残念そうに言った。

「あんたらは、よくがんばってくれたな。来週の日曜日には、立派な桜を咲かせるから見に来てくれな」

「うん、わかった。ぜったいに来る」

そう言うと、四人は帰った。

「それなら、四人で桜の木を見に行くんじゃないかと、りょうすけのおじいちゃんとかもいっしょに行こうぜ」

「そうだな」

「それいいかも」

「それから、クラスのみんなも呼ぼうぜ」

「月曜日から金曜日にかけてさそおうよ」

クラスは二十五人。男子十五人、女子十人、全員をさそうことになった。

日曜日になった。ひろしと、まいと、りんは、すでに来ていた。おじいちゃんも来ていた。女子はみんな来ていた。男子は十人が来ていた。

「げんとだいきとりようとゆうき、とおるはまだ？」

十分遅れてようやくクラス全員がそろった。

「さあ、出発だ」

やっと目的地の桜の木の前に来た。桜は立派な木になっていた。ゴミがいっぱいあったこの森の桜の木とはとても思えなかった。花がきれいに咲いていた。

そのとき、ヨウセイたちが現れた。

「最後に、桜の木にきれいな花を咲かせることができた。ありがとうな」

ヨウセイは、ぼくたちにそう言った後、静かに消えていった。

時空をこえた旅

各務原市立稲羽西小学校

六年

飯鉢 紋衣
いしばち もえ

奥村 菜々子
おくむら ななこ

山田 祐輔
やまだ ゆうすけ

←

敦賀市立粟野南小学校

六年

赤尾 達樹
あかお たつき

石坂 匠
いしがき たくみ

草木もねむる江戸の夜、金と引きかえに、悪をつぶす仕事人なる者たちがいた。

時は変わって現代、仕事人の血は絶えず、裏の社会で身をひそめ生き残っていた。そして、仕事人は着々と力をつけ、今や全世界からいらいが来るようになった。

「起きろ！ 天野」

先生がどなった。天野栄太は小学六年生。となりで、大場由美が笑っている。同じクラスの二人には、秘密があった。平凡な小学生のように見えるが、夜になると仕事人となり、ペアで世界中をかけ回っている。昨日の夜もいらいがあり、夜おそくまで任務をこなしていた。そのせいで、天野は学校でよくねている。大場は真面目な性格のため、学校では絶対にねない。夜、ほとんど勉強が出来ないのに、成績はクラスで一番だ。

夏休み、夜になってもうだるような暑さは変わらない。

今、二人はロンドンにいた。あるマフィアのボスをこらしめてほしいと、夏休み直前にいらいされたからだ。単純な性格の天野は、海外へ行ける任務にワクワクしてたまらなかった。天野は小さい頃に仕事人を知り、独学でトレーニングをして仕事人になった。任務の時はいつも家族にだまって行くか、うそをついて行く。今回も大場との勉強のための旅行といつわって家を出た。

大場の家は、代々続く仕事人の家系なので、こういう任務も素直に話して家を出られる。

ホテルでキーをもらい、キャリーカートを部屋に置いた。天野がベッドにもぐりこもうとした時、

「危ない。ピアノ線があるわ。しかもこの部屋、すごくしかけがしてあるわ」と、大場が冷静に忠告した。

（危ねー）

心の中で天野は命拾いをしたと思った。



部屋には三つのかん視カメラがあった。二人がいる三〇一号室だけにかくしカメラがたくさんあるようだ。

満月がむかえてくれたこよい、二人は仕事人モードだった。針に赤い糸を通し、針先を舌でなめる天野。全身黒い服をまとい、目だけを黄色に光らせた大場。

「今日はロンドンのごちそうだ。満月はオレ達へのプレゼントだ」と言い、二人は金をポケットにしまった。

ふあんぞんぎゅう
黄竜宮の屋根裏にかくれて様子をうかがう。

マフィアのボスはダイヤモンドが散りばめられた金のいすにこしをかけ、右手にタバコを持ち、ひざの上にネコをのせていた。

支配人たちが消えるまで、三、二、一……ガコン！ しかけは大成功！
後はボス一人とネコ一匹。

上からピアノノ線を下ろして……。何かいわ感がある。

右手にタバコ……!!

ボスは時限ばくだんを○・一秒ですばやくしかけたらしい。耳をすますとチツとタイマーが進む音が聞こえる。大場はすぐに天野に知らせた。

何とかして止めなければと、必死にさくを練るが、

ドカーン！

大きな爆発音がした。

そして、その瞬間に時が変わってしまった。

そこは……昭和の時代だった。

「どうなってんだろう？」

大場と天野は混乱した。

「あっそうか、ボスの時限ばくだんにはめられて、時が変わってしまったんだわ」

と大場がさげんだ。

「やった。はまったぜ」というボスの声が聞こえたような気がした。

ボスが逃げたことも知らず、二人は昭和の時代に取り残されたまま、ついに夏休みが終わってしまった。

「あー、出してよー」

天野と大場は何度もさげんでみるが、だれも助けしてくれない。

「もう自分たちでどうにかしないと、きつと出られない……。どうしよう」

「タイムマシンを作ろう。そうすればどうにかなるわ」

二人は必死にタイムマシンを作ろうとした。けれども、なかなか完成しない。

そんな時、窓の外を一人の男の人が通りかかり、

「ねえ、君たち何してんだい？」

と話しかけてきた。

「タイムマシンを作るの。でも、なかなかできないの」

大場が答えると、その男の人は手伝ってくれた。それも無言で……。★

そして、ようやくタイムマシンが完成した。だがそのタイムマシンは、あの、

手伝ってくれた人に改造されていた。

そんなことも知らずに礼を言うと、天野と大場はタイムマシンをそうじゅうした。

「やったー。ようやく現代にもどれたー」

二人はそう叫んだがそこは日本ではなかった。大場はすぐに気づいて天野に伝えた。

「ねえ、天野。ここは日本じゃなくてエジプトよ」

天野は驚いた顔をした。

「なんでエジプトに来たんだ？」

と大場にたずねると、大場はタイムマシンを調べだした。そして大場はこう言った。

「一ヶ所改造されているわ」

「だったら、タイムマシンをさらに改造して、飛行機を作ろうよ」

天野が言うとお大場も賛成して、さっそくタイムマシンを改造し始めた。

十日後——飛行機が完成した。大場は天野に確認する。

「ねじはちゃんと止めた？」

「だいじょうぶだよ。たぶん」

天野は答えた。

「飛行機を動かしてみようよ」

大場がエンジンをかけて動かしてみた。すると、飛行機がくずれてしまった。

「一ヶ所ねじが止まっていけない所があるわ」

とお大場が言うと、さっそくくずれてしまった飛行機を直し始めた。

さらに十日後、飛行機が完成した。大場はねじの止め忘れがないかを確認し、

「ばっちり！」

と言った。しかし、あいにく天気が悪いため、天気の良い日を待つて出発することにした。だが、食料が底をつき、後一日分しかないため、二人は明日が晴

れるように願った。

次の日……。

「やったー。快晴だー！」

二人はさげんだ。飛行機を動かしてみたがこわれることなく正常に動いた。二人はさっそく飛行機に乗りこんだ。

エジプトを出て間もなく、天気が悪くなってきた。さらに、燃料タンクから燃料がもれていることに気づいた。どんどん日本に近づいてきていたが、エンジンは限界を超えていた。天野はもうダメだと思った。大場が、

「この飛行機どんどん落下しているわ!!」

二人とももうダメだ、死んでしまうと思ったしゅん間、誰かの声が聞こえた。

「起きろ！ 天野」

先生がどなった。天野は、

「え？ エジプトは？ 飛行機は？」

と言ったが、

「何をねぼけたこと言ってるんだ!!」

と先生におこられた。

授業が終わった。大場は、今日から夏休みかと思っていると、いらいがきた。

それを見た天野は、

「このいらい、前にもこなかった?」

と聞いたが、大場は、

「こんないらい初めてだよ」

と言った。天野は、さっきの夢はこれから起こることだと思った。

天野と大場は、ロンドンにいた。

まだ、二人の仕事は続く。

くり返す冒険

各務原市立鷺沼第一小学校

五年

立石 翔梧
たていし しょうご

遠藤 正稀
えんどう まさき

立和田 陽
たちわだ あきら

←

敦賀市立松原小学校

六年

梅木 千裕
うめぎ ちひろ

岡 沙絢
おか さあや

坂下 杏瑞
さかした あんず

松川 友美
まつかわ ともみ

ここは、とある町。

丘の上の〇〇市立△△第一小学校に通っている仲良し三人組がいた。

三人は五年B組で、席も近い。

一人はつばさ。足が速くてなんと学年一位。お父さんは学生のころ、マラソン選手だった。

二人目はゲン。野球が得意で、一試合に必ず三本はホームランを打つ。お父さんはプロ野球の選手で、WBCでよく選ばれている。

そして三人目は、大輝。サッカーが得意で、毎日シュートを決める。部活もサッカー部に入って活躍している。お父さんはサッカー選手で、日本代表に選ばれたことがある。

三人は、三人の好きな遊びを順に決めて、毎日のように遊んでいた。

ある日不思議なことが起こった。

いっしゅん、三人のお父さんの子どもたちのころの様子が目の前に現れたかと思

うと、いきなり白い光で見えなくなった。

大輝は、次第に目が慣れてきて、そこがジャングルで、なんと自分が恐竜の巣の上にいることに気がついた。ふたたび白い光が現れ、その光を追いかけて行くと、古い城に着いた。城の中に入ると光は消え、びっくりしてまわりを見回すと、また光が現れた。

ゲンは、断崖絶壁に立っていた。足をすべらせて落ちてしまったが、そこは水そうの中だった。金魚に食べられそうになり、必死で泳いで逃げた。その時、なぜか大輝が現れ、助けてくれた。

つばさは、本の上にあった。本の崖を上り、どんどん上っていくと、とても高い所に着いた。そこに、むらさきの光が現れ、つばさは闇の世界へと連れられて行った。

……大輝は気がついたのだった。白い光は、体の大きさを変えることができるのだと。

くり返す冒険



そして、大輝は三万年前の呪文を使ってつばさを助けることになった。★
だが、肝心の呪文が分からない。

「ゲン、呪文って何だろう」

二人は、だまりこくってしまった。

その時、ゲンがさげんだ。

「あつ、そのペンダント！」

「ああ、これ。ひいじいちゃんがなくなる前に渡してくれたんだ。『心から必要だと思った時、このペンダントを開けなさい。きつとおまえを助けてくれるはず』ってね。ああ、そういうえば、今ぼく、心から必要だと思ったよ」

ゲンが言った。

「開けてみようぜ。何かヒントがあるかもしれないし」

「開けてみるよ」

ごくっ。二人はつばを飲んだ。パカッ。開けてみると、中には何かほられて

いる。

「ん。何だ、これ」

「何か書いてあるのか」

ゲンが歩きながら聞いてきた。

「何て書いてあるか分からないんだ」

「どれどれ。え、レームルヘンリーン」

「何？ レームルヘンリーン」

大輝が聞き返したとたん、白いけむりがあがった。

「うわあ」

二人はびっくりして、しりもちをついてしまった。

ゲンは、おそろおそろ目を開けた。すると、目の前に金ばつの女の子がいた。

世中には白い羽が、頭の上には輪があった。

「君はだれ？ ま、まさか、天使。まさかねえ」

ゲンがどぎまぎしていると、女の子ははっきりした声で言った。

「はい。その、まさかのまさかです。私は天使のジューン。大輝さんのお手伝いに来ました」

「お手伝いって」

その問いを無視して、ジューンが聞いた。

「私がお手伝いすることは決まりましたか」

二人はとまどったが、ゲンが言った。

「つばさのいる所に連れて行ってくれ」

「かしこまりました」

そう言ったかと思うとむらさきのけむりが出て来て、気が付くとそこは闇の世界だった。

「ここ、どこ？」

「もちろん、つばささんのいる闇の世界です」

二人はつばさのいる所について言ったのにと、顔を見合わせた。その瞬間、何かが目の前を横切った。つばさだ。二人が一生懸命追いかけていくと、城が見えて来た。城に入って、やっとつばさをつかまえた。そのとたん、つばさは消え、声が聞こえてきた。

「ハッハッハ。ようこそ魔王の城へ」

声のする方を見上げると、つばさはいた。が、何か様子がおかしい。おそろしい顔になったり、苦しみ出したり、いつもの顔にもどったり、おそろしい言葉を言ったりする。魔王にあやつられているようだ。二人は、顔を見合わせて息をのんだ。その時、大輝は魔王の城なのに魔王がいないことに気が付いた。そこで三人は、ゲンと大輝、ジューンの二手に分かれて、探すことにした。

もう何か所開け閉めしたのだろうか。その時、明かりのついている部屋を見つけた。入ってみると、ジューンが大きなすにすわっていた。

「私は魔王のジューンだ」

二人があ然として立ちつくした時、向こうからだれかが来た。ジューンだ。二人はさらに目が真ん丸になった。ジューンが二人いる！すると、天使のジューンが、

「私たちは双子なの。私は、さっきいっしょにいたジューン」

そこまで言うと、天使のジューンは向きを変えた。

「ジューン。早くつばさを二人に返しなさいよ」

「おまえこそ早く帰れ。つばさは、このおれがあやつっている」

この様子を見て、大輝は思わず、

「つばさをかけて、勝負しよう」

と言ってしまった。言った後になって、自信がなくなって来た。相手は魔王なのだ。でも、しかたない。ゲンは野球、大輝はサッカーという得意分野で勝負することにした。

一回戦。相手からホームランをどれだけ奪えるかで競った。三対二で、ゲン

が勝った。二回戦、PK対決。どちらもなかなかシュートが決まらない。しかし、ぎりぎりのところで、一対〇、大輝が勝った。

「つばさは約束どおり返してもらおう」

すると、魔王は、

「分かった。つばさは返す。だが、覚えておけ。この戦いはおまえたちの子孫にも続く」

と言って、消えていった。

二人は無事つばさを助けることができた。お礼を言う二人にジューンは、

「このペンダントは、大輝の子孫にひきついだね。あなたたちの友情は本物よ。ありがとう」

と言った。そして次の瞬間もうジューンはいなかった。

三人は白い光で元にもどり、何もなかったように過ごした。

——二十三年後。

ここは、とある町。

丘の上の〇〇市立△△第一小学校に通っている仲良し三人組がいた。

開かずのトビラの謎

各務原市立鵜沼第二小学校

六年

むらかみ ゆきの
村上友紀乃

すぎうら もえか
杉浦 萌香

←

敦賀市立敦賀西小学校

六年

かわもと ようは
川元 遥巴

にしもり みおん
西森 海音

まつい ひな
松居 ひな

「絶対に、この部屋に入ってはいけない」

お母さんは話し続けた。

「昔、女の子がどこかへ行ってしまったって、警察や近所の人たちがどれだけさがしても見つからなかったことがあるの。あの部屋ではないかとみんなが入ってみたけど、そこには何もなくて、部屋中が真っ白だったと言い伝えられているわ。今はもう開かずの間として残っているの」

詩緒里は不思議に思った。お母さんはそんな迷信なんて信じるような人じゃないのに……。

次の日の朝、詩緒里は自分の部屋のそうじをしている時、クローゼットを開けようとしたら、何かが頭にあたった。

「いたっ。何これ？」

それは古めかしい木箱だった。詩緒里はおそるおそる木箱のふたをとる

と、かい中時計と白黒の家族写真が入っていた。かい中時計の裏には「しおり S15.10.26」と、きざきざまれていた。写真には、両親と五才くらいの女の子と三才くらいの男の子が写っていた。私と同じ名前のしおりさん……。もしかしたらこの人が昔、開かずの間で消えた女の子かもしれない。

詩緒里は、お母さんが話していた部屋に入り、しおりさんに会いに行こうと思っただ。

その日の夜中の一時ごろ、木箱とライトを持って両親に見つからないように、こっそり家をぬけだした。

ようやく、開かずの間に着いた。周りには不気味なほど静まりかえっている。とびらの取っ手に手をかけるとヌルヌルした感じよくがして、詩緒里は思わずさげんだ。

「わあっ」

そのしゅん間、手に持っていたライトを落としてしまった。辺りは真っ暗。

開かずのトビラの謎



落としたライトは見つからず、仕方なくあきらめた。それでも木箱は大事に両手でかかえこんでいた。

詩緒里は木箱の中のかい中時計と白黒の写真を手に取り、やっぱりしおりさんを助けたいと思った。

しん重に進み、もう一度とびらの前に立って取っ手をにぎると、またヌルヌルした。

力を入れて開けようとしたが……開かない。

「どうしよう……」

詩緒里は、泣きそうな声で言った。

そして、木箱から写真とかい中時計を取り出した。木箱を裏返すと、

『一、コヤノウラニイク

二、ソコニアルカンバンヲミル』

と、書いてある。詩緒里はその通りにした。

看板には、『開けよ、過去のとびら』と書いてあった。

詩緒里は開かずの間のとびらの前に立つと、唱えるように言った。

「開けよ、過去のとびら」

一しゅん、光に目がくらんだ。

気がつくと、詩緒里は部屋の中にいた。きれいな部屋で、古びた机といすがあった。机の上にはアルバムが置いてあり、いすは誰かが座ったような形跡がある。詩緒里は机に近づき、アルバムを手に取った。アルバムのページをめくると、しおりさんやその家族の写真があった。周りは少し散らかっていたので、詩緒里は何気なく片付け始めた。

すると、子ども一人がやつと入れるような小さなクローゼットが姿を現した。まるで、今までかくされていたかのように。

クローゼットのとびらを開けると、奥の方に階段が続いていた。詩緒里は足元に気をつけながら、階段を下りていった。何十段もの階段を下りきると、周

りが急に明るくなつた……と思つたら、光を放つものが見え、近づいてみると急に景色が変わつた。

そこに広がるのは、昭和の町なみだつた。

そこには、しおりさんがいた。

そこは、写真に写っていたしおりさんの記おくの中……。★

詩緒里は、ぼうぜんとした。ぼうぜんとしていたため木箱を手から落としてしまった。

「あつ……」

詩緒里が木箱を拾おうとした時、だれかが木箱を拾つた。拾つたのはしおりさんだつた。

「ねえねえ、お姉ちゃん。なんでしおりの宝箱持ってるの」と、しおりさんが問いかけてきた。

「え……えつとね。その木箱落ちていたので拾つたの」

とつさにそんなうそをついた。

「本当？ お姉ちゃんありがとう。これはね、しおりの大切なものなの」
「そうなんだ」

詩緒里は、つぶやくように言った。

「あっそくだ。お姉ちゃん、名前なんていうの？」

「詩緒里っていうの。しおりさんと同じ名前だね」

「うん」

しおりさんは、うれしそうだった。

「あのね、お姉ちゃん、しおりと遊んでくれる？」

「いいよ」

私たちは、おしゃべりをしたり、かくれんぼや鬼ごっこをしたりして遊んだ。

楽しい時間は早く過ぎていった。

「しおりー、帰ってきなさい」

どこからか声が聞こえてきた。

「あつ、お母さんだ」

「しおり。帰るわよ」

「えー、もつとお姉ちゃんといたい」

しおりさんは、泣き出してしまった。

「あら、あなた、見ない顔ね」

と、しおりさんのお母さんがたずねてきた。

「あつ、私、今日しおりさんと友達になった詩緒里です」

「しおりと友達に」

おどろいた顔。思わず私もおどろいてしまった。私はしおりさんに、

「また明日、十時にここで遊ぼう」

と、約束した。

目がさめた。昨日しおりさんと別れた場所に立っていた。どこで寝たのか分からずいると、しおりさんのお母さんが走ってきた。

「しおり、知らない？」

私はその言葉を聞いたしゅんかんピンときた。

すぐにしおりさんの家へ行き、あの部屋へ続くとびらをさがした。しおりさんの部屋に着いたとき押入れが開いていて、おくに小さなとびらが少し開いていた。中からしおりさんの泣いている声。

「今なら救えるかも」

私はそのとびらを開けた。

しおりさんが泣いている。手には、あのかい中時計。私はとっさにしおりさんの手を持ってその部屋から出た。そのとき、しおりさんがかい中時計を落とした。私を取りに行くのととびらがしまった。そして目が覚めた。

私は、自分の部屋のベッドの上にいた。手には、あのかい中時計を持っていた。しおりさんを助けることができたのか心配になった。助かってほしいと願った。そしてお母さんの声。

「起きなさい。朝よ」

そして、学校へ行くときちゆう……。

「しおりおばあちゃん。昔のお話して」

小さな女の子が、うれしそうに話しかけている。

「おばあちゃんはね、しおりちゃんっていう、おばあちゃんと同じ名前の子に助けられたのよ」

そして、詩緒里の方を見て言った。

「そう。あなたぐらいの女の子に」

「えっ」

タイムスリップ 双子の未来旅行

各務原市立那加第三小学校

六年

藤田 茉希
ふじた まき

浅野 未菜美
あさの みなみ

川島 佑佳
かわしま ゆうか

←

敦賀市立東浦小学校

六年

入野 つゆき
いりの つゆき

五年

吉峯 由夏
よしみね ゆか

二〇十五年十二月二十五日、四人の子どもが姿を消した。メルヘン小学校の六年生で双子のみゆとまゆと、りょうたとりゆうた。四人はとても仲がいいがしよっちゆうケンカをする。

あるとき、四人の家のポストに不思議な招待状が入っていた。

『未来に行ってみませんか？』

今夜十二時にメルヘン公園に来てね！（こっそりね）

まみより』

「まみって、だれ？」

「ためしに行ってみる？」

と、みゆとまゆが言った。

ピンポーン。

「オイ、これ見ろ！ おもしろくね？」

りょうたとりゆうただった。りょうたの手にはあの招待状がにぎられている。

「えっ、それ……私達にも来た……」

「四人で行ってみる？」

「今日の夜十一時五十分に公園に集合ってことでいい？」
みゆとまゆが言った。

「OK！ 十一時五十分に公園な!!」

「十二時になったね」

とつぜん空がパァーッと光り、目を開くと見知らぬ光景が広がっていた。
そして、かわいらしい女の子が歩いて来た。

「はじめまして」

「……だれ？」

四人は口をそろえて言った。

「私はまみ。あなた達に招待状を送ったでしょ」

タイムスリップ 双子の未来旅行



「え？ あなたがまみ？ かわいい」

「本当、かわいいな」

「ところで、ここどこ？」

りょうたが聞いた。

「うーん。カンタンに言えば……百年後。まあ、未来！」

「えー？ 本当に未来なの？」

四人は声をそろえて言った。

「まず、私の家に来てよ。家族にも紹介したいんだよ♪」

まみの家。

「え！ コレ何？ あつ、コレ不思議」

百年後の世界には、空とぶ車や、あのドラ○もんのどこでもドアまであって、
四人は興味しんしん。

「そんなにめずらしい？ 昔はなかったの？」

未来では空とぶ車など当り前のようだ。ゴホン、とせきばらいをして、まみが話し始めた。

「あのね、あなたたちをここに呼んだのは、今、ある問題がすごく日本を苦しめているからなの……。その問題はね、一言でいうと人口減少」

「人口減少？ ココにはたくさんの方がいるじゃないの」

確かに、ここにはたくさんの方がいた。

「ちがうの。人口減少っていうのは、意思を持ったウイルスによって、人のたましいが取られちゃうことなの。ウイルスを退治する方法が二つだけあるわ。」

一つは、ウイルスの（見えない）親玉を見つけてたおすこと！ まあ、これがむずかしいのよ。もう一つは、もう少しかんたんで、ある強力な助っ人を見つけて、五つの病原菌をたおすこと！ それができたら、日本復活！」

「ねえ、強力な助っ人ってだれ？」

と、りゅうた。

「ないしょ。じゃあ、がんばってね〜！」★

「もう教えてくれたっていいじゃないの」

と、まゆ。

「まあ、まあ」

と、みゆ。

「まっ、まず聞きこみからってことねっ」

まゆが言った。そこで、りゅうたが、

「はあ、そんなトロイことやってられっかよ」

「じゃっあ、他に方法でもあんの」

と、まゆとみゆが言いかえすと、

「……」

りゅうたはだまってしまった。

「じゃ、き・ま・り・ね！」

ということとで歩きだした。

「まずはレディーファーストということとで私たちから」

と、まゆとみゆは二人の意見も聞かずにずんずんと歩きだした。

そこに一人のおばあさんがすわっていた。

「まずは、あの人からね」

「あのう、すみません」

「はい。何でしょう」

「この町にいる強力な助っ人のことについて何か知っていますか」

「あっ、孫のことね。ちよつとうちにいらっしやい」

二人はおばあさんのうちに案内された。するとそこには、たくさんの男の子と女の子の写真があった。

「この子たちはだれですか」

「これが、わたしの孫たちの雪乃と雪兎ゆきとです」

「わあ美男と美女ですね。この子たちが強力な助っ人ってどういうことですか」と聞くと、

「この町にある絶対あたるといわれる神の予言によると、この子たちが世界を救うと言われたのです」

「へえ。そうだったんだ。その子たちは今どこに」

「はい、学校にいます。今ごろ休み時間でしょう。会ってきてはどうでしょう」「はいっ、そうします」

と言うと、まゆとみゆはりゆうたたちのところに帰った。

「どうだった」

と、りょうた。まゆとみゆは今までのことを話した。

「ふうん、そうだったんだ。じゃあ、さっそく学校に行くか」

四人は学校に向かって歩きだした。

学校に着くと、雪乃と雪兎は人気者だったのですぐにわかった。

「きみたちが雪乃ちゃんと雪兎くん」

「はいそうです。ぼくたちに何か用ですか」

「きみたちは、この地球に人のたましいをとるウイルスが知っていることを知っているかい。今、そのウイルスによって人口減少がおきているんだ。これをふせぐためには、ぼくたちだけじゃなくきみたちの力も必要なんだ。お願い。協力してくれ」

とりょうたが言うのと、

「はいっ、わかりました」

といきおいよく返事がきた。

「やった。でも私たちとりゅうたたちは、たおし方知らないよ」

とみゆが言うのと、

「実はぼくたちも知らないんです」

雪兎は残念そうに言った。

すると……。

「私、知っているよ。あのね、この事件、千年前にもあったんだって。それでね、私考えたの。私って靈感が人の十倍も強い。だから、千年前の強力な助っ人に話を聞いてウイルスをたおす方法を教えてもらおうの。ねっ、いい考えでしょ」と、雪乃がうれしそうに言った。

「うん、その考えいいわね。それにしよう」

みんながいつせいに言った。

六人は、町でその助っ人の霊をさがすことにした。

さっそくだれかが立っているのが見えた。やはりそれは、助っ人だった。

「そうだったのか。ではウイルスをたおす呪文を教えよう。ロエーキウイルスだ。では、がんばってくれ」

と言うと、去っていった。

その時ウイルスが空から大量にふってきた。

「ロエーキウイルス！」

と、大きな声で思いつきり言った。

「あれ、きかないわ」

「はあーはあー、なんだ夢だったのか」

「おいしい、みゆ。だれかからの手紙が届いているよ」

見てみると……。

「んっ」

それはまぎれもなく夢でみたままからの手紙だった。

夏休みのミラクル

各務原市立八木山小学校

六年

荒木 結衣
あらき ゆい

肥後美紗稀
ひごみ さき

佐々木天羅
ささき てら

←

敦賀市立黒河小学校

六年

齋藤 智香
さいとう ちか

彦惣 夕維
ひこそ ゆい

「Allô (アロー)」

今、私パリにいるの。私の名前は、リリカ。なんでパリにいるかというところ、二日前におばあちゃんから電話があったの。

「ねえ、リリカちゃん。あさっておじいちゃんと旅行に行くんだけど、ほら、家にシャツ・レーズがいるでしょ。お留守番をお願いしたいの」

シャツ・レーズは、おばあちゃんが飼っている猫。

「うん、いいよ」

「じゃあ、飛行機のチケットは用意しておくからよろしくね」

おばあちゃんの家はフランス。猫の世話も悪くはないか、と思って引き受けた。

にゃーん。

「よしよし。やっぱ猫はいやされるなあ」

おばあちゃん家に着いた日の夜。

ガタガタガタ。

「今日は風が強いなあ」

私が外を見ていたら、ビュンと大きな黒いかたまりみたいなものが、目の前を横切った。

「な、なに？」

急に怖くなって、おばあちゃんに電話した。

「もしもし、リリカだけど、おばあちゃん？」

私がさつき見た物をたどたどしく説明すると、

「それは、ガーゴイルだと思おうわ」

「ガーゴイル？ ああのゴシック屋根の上の置物のモチーフになっている怪物？」

「そうよ、明日、森に行ってみたら会えるかもしれないわ」

「うん！ 行ってみる」

夏休みのミラクル



私は、サンドウィッチを作って、早く寝た。

翌朝、にゃーんと鳴く声でびっくりして目覚めた。

「なんだ、レーズか。おはよう」

私は、朝食を簡単にすませ、レーズを連れて外へ走り出した。

森は意外に近い。走れば五分くらい。だけど、わけのわからない紋章がついた大きなかべがあつて、中には入れない。

その時、レーズのペンダントについているプレートが虹色に光りだした。

「何？」

すると、かべが白い光に包まれて、あっという間に消えていった。

「おっ、開いたぞー！」

「だれの声？」

「僕だよ、僕。レーズだよ」

下を見ると、レーズがしゃべっている。

「しゃ、しゃべったあ〜」

私はこしをぬかしてしまった。

そこへ、森の中から一人のおじいさんが出て来た。

「おお、レーズじゃないか」

「あつ、長老、久しぶり〜」

「まあまあ、中に入りなさい」

私は、レーズの後ろを歩いて行つた。

私は長老と呼ばれる人物にお茶を出してもらい、お礼を言った。

「はあ、おいしい」

「おっと、紹介がおくれちゃつた。この人は、クヌツセンだよ。みんなからは

長老って呼ばれているんだ。で、こっちはリリカちゃん」

「こ、こんにちは」

「よろしくたのむよ。で、何のためにこの森に来たのかね？」

「えつと……ガーゴイルを探しに来ました」

「おお、ガーゴイルかあ」

「えつ、知ってるんですか？」

「ああ、うちの村にいるぞお、呼んで来よう。ちょっと待ってておくれ」

と言つて、長老はありえないスピードで走り去った。レーズの話では、長老は今でも陸上の選手なんだとか……。

そう話している間に、長老が目の前に立っていた。

「いつの間に！」

私は口をあけたまま、びっくりして硬直していた。

「おい、ガーゴイル、入って来い」

「ハイ」

入って来たのは、ゴシック屋根にいたあの怪物そのものだけど、意外に優しくそうだ。話を聞いていると、ガーゴイルがこんなことを言い出した。

「昔、この村にもう一匹ガーゴイルがいたんだ。そいつの名はグル。昔つからやんちゃで、物をいっぱい壊したりしていたんだ。最初はサラダのレタスをバジルにしたりしたただけだったんだが、おととい、イギリス行きの飛行機を壊しちゃったんだ」

その話を聞いて、私はだんだん心配になってきた。なぜかって、おばあちゃんたちが今イギリスに行っているから。私は家に走って帰り、おばあちゃんに電話をかけた。

ツーツー。

(つながらない……。どうしよう?)

涙目になって後ろを振り向くと、長老とガーゴイルがそこにいた。

「おばあさんの事が心配なんじゃろ?」

私はうなずく。

「では、イギリスに行くか?」

「うん、行く。でも、どうやって?」

「世界につながっているわしらが使つとる穴があるんじゃない。ついて来なされ」
私たちは森に向かった。長老によると、この森の奥に穴があるらしい。しばらく歩くと、長老が立ち止まって大声を上げた。

「おお、なつかしい牛乳じゃ。チーズになつとる。おおうまい。お前らも食べるか」

そんなことを言いながら、さらに歩いていくと穴が見えてきた。

突然、ググググと音がした。振り返ると、長老がお腹を抱えて倒れている。

「長老、ばれてるって。本当は行きたくないんでしょ」

「やっぱりばれたー」★

「やっぱりばれたーって、そんなこと言っていないで早く行こうよ」

ガーゴイルが言った。

「いや、ちょっと待って。話すことがあるんだ。僕の名前は、クルだよ。自己

紹介が遅れてごめんよ」

クルが、私にささやいた。

「なに？」

「……」

「なんなの、どうしたの？」

「一度しか言わないよ。いや、一度しか言えないよ。誰が聞いてるか、分からないから」

クルは、小声で言った。

「僕と、グル、長老の息子が、右手についているブレスレットと心を合わせる
と、全ての悪い心を幸せへと導いてあげられるんだ」

「……」

「でも、そんな僕たちのことを、悪く思う人がいるんだ。名前は、ロイドって
いうんだ。ロイドは、聞いたところでは、昔はすごく優しい人だったらしい。

でも今は、目はいつも怒っていて、見るからに無残な洋服を着ている。ロイドは、親から見放されたらしいんだ。それで、悪い心をもってしまったんだ。だから、僕たちのような人をにくむんだ」

「……」

「ある日ロイドは、ある行動に出たんだ。この穴に、わなをしかけたんだ。それも、とても簡単なわなを」

「そのわなって、何？」

私が、口をはさんだ。

「そ、それは、ちよつと言いくいんだけど、僕たちが通った穴の天井に、僕たちを捕まえるための網をしかけたんだ。けれども、それに気がつかなくて、僕たちは遊び半分の中に入ってしまって、網に引っかかってしまったんだ」

「でも僕だけは助かったけど、ロイドにつかまったグルと長老の息子の行方は、いまだに分からないんだ」

「長老は、そんな過去を思い出すのがいやなのだろう。きつとつらいんだろう」
「そ、そんな……。あつ、長老、そんなこと知らないで、ひどいこと言ってごめんなさい。私、何にも長老のこと知らないから、つい自分の思いのまま、次々発言しちゃったんだ。本当にごめんなさい」

私は、申し訳なさそうに言った。

「いや、いいんじゃない」

「私、きつとグルも長老の息子さんも、無事に違いないと思う」

「えっ」

「だから、一緒にイギリスへ行こう」

ということ、長老は、勇気を出して穴に入って行くことにした。

「こんな年で、子どもになくさめられるなんて、まだまだあまいな。さて、行くか」

「ありがとう」

そういうことで、長老、クル、私、レーズの順で穴に入ることにした。
スウツー。吸い込まれるように穴に入って行った。

「やっと着いた。でも、ここどこ？」

「おばあちゃんたちがいるイギリスさ」

レンガ作りの高い建物、にぎやかでおしゃれで、赤い二階建てのバスが通り、
遠くの方には緑の森が見えた。

「さあ、おばあちゃんたちが泊まっているホテルへ行こう」

「いなかっただらどうしよう」

「だいじょうぶだよ。さあ、いくよ」

白いお城のような大きなホテルの前に着いた。

「パリから来た、お年よりいますか？」

「ご予約はされておりますが、まだいらっしやいませんよ」

「ありがとう」

「空港に行ってみる？」

「ええ」

空港に着いたら、パ〜ポーパ〜パ〜と、大きな音が聞こえて、目の前にパトカーが見えた。

「なんだか、いっぱい人がいるよ」

警官が、こう言った。

「さらわれたのは、パリから来たお年より二人だ」

クルからグルがイギリス行きの飛行機を壊したと聞いていた。無事飛行機はイギリスに着いたが、お年より二人は、ロイドに人質にとられたらしい。

「さらわれたのは、おばあちゃんたちかもしれないわ」

ダッ、ダッ、ダッ。

「あつグル、そしてガル」

「ガルって?」

と、私が聞くと、クルが答えた。

「長老の息子だよ」

「グル、ガル、どうしたの?」

「ひっひっひっ。僕たちは、クルをつかまえにきたんだ」

「逃げろー」

ピカーン。レーズのペンダントのプレートが光った時、虹色の光に包まれてグルとガルの思い出が虹色の光の中で回り始めた。

「何この光。あれ、グルとガルが元に戻ってるー」

「さっきの光は、このペンダントさ」

と、レーズが言った。

「じゃあ今度は、僕たちの力でロイドの悪い心をよい心に戻そう」

グルとガルとクルのブレスレットと心を合わせた時、ブレスレットから出た

緑色の光がロイドを包んだ。

「わあー」

と、ロイドがさげんだ。

「ロイドの悪は、もう消えたよ。おばあちゃんたちを早く助けよう」

三人の力を合わせ、全ての悪い心が幸せへと導かれたおかげで、おばあちゃんたちは無事助かり、ロイドは元の優しい人にもどり、イギリスで結婚して幸せに暮らしているそうだ。

ガーゴイルたちは、長老の家の屋根の上に住んでいて、長老たちを守っているそうだ。

レーズは、人間の言葉をしゃべらなくなったけど、おばあちゃんたちと私はパリで楽しい夏休みを送っている。

屋根うら部屋と 不思議な本

各務原市立鵜沼第三小学校

六年

今井紫央里
いまいしおり

塚本桃子
つかもと ももこ

中村香音
なかむら かのん

←

敦賀市立常宮小学校

六年

中村美優
なかむら みゆう

五年

山田悠河
やまだ ゆうが

山本菜月
やまもと なつき

中村友梨香
なかむら ゆりか

ぼくたちには二人だけの秘密がある。それは……。

「ここが新しいぼくたちの家か」

ぼくは、ゆうき。小学校六年生。今日この家に引っこして来た。

「お兄ちゃん、早く！ 早く！」

これは、ぼくの妹、さや。活発な小学三年生。

この家であんなことが起こるなんて、まだぼくは知らなかった。

「ねえ、ねえ、探険ごっこしようよ」

しようがないなー。

「お兄ちゃん、屋根裏部屋があるよ」

「本当？」

タッタッタッタ、ギー。

「けほけほっ！」

「ほこりだらけじゃん！」

「わあ、すごい。本がいっぱい！」

そこには、図書館のようにたくさんの本が並んでいた。

「前に住んでいた人のかな？」

「さや、このお話知ってる」

「ぼくだって、知ってるよ。『ヘンゼルとグレーテル』だろ？」

「おかしな家かあ……いいなあ。さやも行ってみたいな……」

その瞬間、太陽のように明るい光がぼくたちをつつんだ。

「ここ、どこお？ 何、この服！」

ぼくたちは、森の中にいた。

「ちよっと歩いてみよっか」

ガサガサ。

「お兄ちゃん、いいにおいがする」

屋根うら部屋と不思議な本



「本当だ」

「わあ、おかしの家だあ〜!!」

ぼくたちは、顔を見合わせた。この服、そしておかしの家。もしかしてここは、ヘンゼルとグレーテルのお話の中!?

「食べていいのお?」

「ダメに決まってるだろ」

「もう、ガマンできない」

ムシャムシャ……。

「おいしー!!」

ガチャ……。ま女のおばあさんだ!

「おやおや、かわいいそうに。おなかですいているんだね。中に入ってたあんとお食べ」

「行っっちゃダメだ」

「やさしそうだから行こうよ」

「さあ、入って。どうぞ」

さやが入って行った。

「待てよ〜！」

そこには、食べ切れないくらいのごうかな料理が並んでいた。

「お兄ちゃんも一口ぐらい食べてみなよ」

「やだよ」

「遠りよしないで、どんどんお食べ」

「そうだよ〜」

「じゃあ、一口だけ」

……あれ、何でこんなところにいるんだ？

「さや〜、どこにいるの？」

その頃さやは、ま女のおばあさんにこき使われていた。

それぞれが（家に帰りたいたい！）と思ったとたん、再び明るい光が二人をつつんだ。

気がつくと、二人は屋根裏部屋の本だなの前にいた。

「早く荷物の片づけしなさい」

と、お母さんが下から声をかけた。

「ねえ、本の世界では時間が止まっているのかな？」

「さや、この本のことには、絶対にだれにも言うなよ。分かったな」

「ふう、つかれた〜。さや、片づけ終わったか〜？」

「明日、だれに本のこと話そうかな……」

と、さやは自分の部屋でつぶやいていた。

「おい、さや！」

さやが飛び上がった。

「ごめん！ ごめん！ 絶対だれにも言わないって約束するから！」

「絶対言うなよ！」

「明日は、本の中に行っちゃダメ？」

「だれにも言わなかったら、連れてってやる」

「ヤッター」★

次の日。ぼくたちはまた、屋根裏部屋へ行った。

「お兄ちゃん、今日はどの本の中に行く？」

さやは、首をのびして本だなをのぞいている。

「そうだなー。どの本がいいかなー」

その時、一冊の本が、ぼくの目にとまった。

「どうしたの？ お兄ちゃん」

「あの本、気にならないか？ どこかで見たような……」

ぼくは、その本を手にとって開いた。

「あっ！ さや、この本見たことあるよ！ 題名は忘れちゃったけど……。あれ、この本、表紙がないよ」

ぼくは表紙を見た。たしかに表紙はない。

「それに、ページには絵しか残ってないよ。あとは真っ黒！」
絵以外の所には、すみでぬりつぶしたようなあとがあった。

「どういってお話なんだろう」

すると、また、あの明るい光がぼくたちをつつんだ。

「またあー？」

「こんどは、何かの会場みたいだよ。あれー。お兄ちゃん、なんでまだ本持っているの？」

「おかしいなー。この本の中に入っているはずなのに……。えっ、あれ？ この本の中にぼくたちの絵があるよ！」

そこには、ぼくとさやが、クイズ番組の会場に立っている絵があった。

「クイズ番組のスタジオ？」

おどろいて振り返ると、そこには、二組分のクイズの席があった。

「クイズ番組の会場だったんだ、ここ。おもしろそうだね、お兄ちゃん」

「まあ、そうだな」

ぼくとさやは、この本から出ようと思わないで観客席のほうへ走っていった。が、それがいけなかった。

その時だった。いきなり後ろから、

「あなたたち、時間ですよ！ 早く席に座って！」

と、黒い服に赤いネクタイの男の人が言った。

一瞬、ぼくは、何が何だか分からなくなった。

「さあ、その席に座って！」

そこは、さっきの会場のクイズの席だった。

「さやたちがクイズやるの？ 楽しみー」

さやは喜んでいる。ぼくも、初めは楽しみだった。

「さてさて、それではさっそく第一問！ あっ、言い忘れてたけどー、このクイズは三問までです。そしてそして、なんと全部解けるまで、この本からぬけだせませーん！」

「えっ、今なんて言った？」

ぼくたちは、一瞬凍り付いた。

「えっ、帰れないの！」

「さや、どうする?」

「ちなみに、ここから帰れた人は一人もいませんーん！ だからガンバッター」
えー!? 横を見ると、問題にうなざれている(?) 人がたくさんいた。

「さやたちもあんなふうになっちゃうのー。ヤダヤダー」

「じゃ、ガンバロー。第一問！ かさをかぶっているのに、いつもびしょぬれ

「な生き物はなーんだ？」

「はじめからむずかしいな！ そのとき、さやが、

「こっ、こっ、答えは……クラ……ゲ？」

「……正解です。見事！」

「さっ、さや、すげえなおまえ」

「ふふっ、だってー友達から出されたことあるもーん」
「なんだ。それでか。」

「じゃあ第二問。一と四の間にいる人って男の人？ 女の人？ どっーちだ？」
「ぼくはすぐにわかった。一と四の間は二と三。だから、

「ハイイ。答えは男の人です」

「当たり前ー。早かったですネー！ ビックリー！」

「この調子だったら、大丈夫だね！ お兄ちゃん」

「ぼくもはじめはそう思ったんだ……。」

「じゃ最後の問題。これはクイズじゃないよ。1×3×1000×1×50×35×2×72×2×5×0×20×200×51×900×91×82×5は？」

えー……分かるわけないじゃん！ さやは、必死に、

「1×3∥3、3×10000∥30000、30000×1∥……」

と言っている。

「あー！ 分かった！ 答えは0だ！」

「おい、さや、そんなわけ……本当だ」

「ダダダダダダン！ せ・い・か・い・です！」

「ヤッター」

そう言った瞬間、ぼくたちは屋根裏部屋にいた。

「あ、本に表紙がついている！」

ぼくは題名を見てみた。

「『クイズゲーム』これは……もしかして！」

その本は、さやとぼくが小さいころに書いたものだった。

それ以来、ぼくたちはもう二度と本の中に入ることはできなかった。

イチゴ

各務原市立陵南小学校

六年

佐藤 さとら

里奈 りな

大西布美果 おおにしふみか

田部 たなべ

仁菜 にな

←

敦賀市立中央小学校

六年

伊達 だて

朝香 あさか

「緊急ニュースをお知らせします。ただいま、午前十時八分、地球に向かって
いん石がつい落しようとしています。ただいま、地上から一万キロメートル地
点を落下中のもようです……」

今から四日前、私達三人があのカギを拾ってしまったことから物語が始まっ
た――。

わんぱくでドジなイチゴこと盛田^{もりた}苺^{いちご}と、ウラオモテがはげしく、細かいこと
が得意なリンこと岸^{きし}奈凛^{なりん}と、チョー切りかえが早くて、細かいことは苦手なマ
コこと大乃真琴の三人は、今日も楽しく下校をしていた……ハズだったが、

「あ！ 何か光ってるやん！」

凧はかけて行つた。

「これカギやん！」

「何のカギやねん」

「何かキレーやねー」

「とりあえず、今日もウチん家に集合ね」

「リンがカギ持ってくわ」

「じゃあ、私ん家そっちやから、また後でねー」

「あい変わらずイチゴは大阪弁慣れんなー」

苺は約三か月前、岐阜から引っこして来たばかりだ。

「ウチらは、なじんどのになー」

「じゃあ、イチゴン家だな」

苺の家に三人が集まった。

「さっそくだけど、カギ見よっか」

三人がいつせいにカギにふれたとたん、カギは太陽のようにまぶしく光りかがやいた。三人はおどろく間もなくカギにすいこまれていった……。

「うーん？　ここどこや？」

「今までアタシの部屋にいたよねー」

「なんでやねん！　ここどこやねん！」

三人は暗い森の中にいた。どこからか、フクロウの鳴き声がする。

「とりあえず進もか！」

「マコー」

切りかえの早い真琴の後を、二人は急いで追った。一生けん命暗い道を歩いていると、出口が見えた。

「やっぱ、ウチこうゆう時、役立つんやで。どうやろ。すごいやろー」

一面緑が広がり、キレイな花が咲きほこっていた。そこは小さな星、チコ星だということが分かった。チコ星は、星のウラ側も見える不思議な星だった。

「あ!!　お城やん、アレ」

「うわー」

空のように青い屋根と雪のように白いカベ。おとぎ話に出てくるようなキレイな城だ。三人はそこへ入って行った。光るシャンデリアにゴージャスなじゅ

うたん。

三人は見とれてしまい、そこで王が会議をしていることに気がつかなかった。

「ハハハ。ワレラハ、インセキトシテ、チキユートイウホシニ、ムカオウトシテオルノダ。コノチコセイハ、ジソク三十マンキロデ、ホツカイドーニ、ムカツテオル。ワレラハ、チキユーラメツボーサセル。ツイラクジカンハ、ニホンジカン、ニガツ十四カノ、ゴゼン十ジ十ブンダ」

「えっっ!!」

苺が大声をあげてしまったので、みんなの視線が集まった。

「イチゴ〜!」

「ダレダ。ソコニオルノハ」

苺のドジには、二人ともこりこりだ。

「コイツラヲ、ソトヘダセ」

そう言うと、王は家らいを呼んだ。

「まって!!」

真琴がさげんだ。

「なんでや。なんで地球にいん石なんか落とすんや!!」

「ワレラハ、チキューニ、インセキヲオトシ、チキューヲ、メツボーサセ、ワレラノホシニ、スルカラデアル」

そう言うと、王は三人を外へ放り出した。三人はぼうぜんとしていた。

「マコ、リン、本当ゴメン!!」

苺があやまった——そこでまた、切りかえの早い真琴が、

「だいじょうぶだつて。みんなで考えようや」

「マコ、ありがと」

三人は、まず地球にいる人達にこの事を伝えようと思った。しかし、どうやって伝えようか——。考えているうちにも、チコ星はどんどん地球に向かっていく。そのうちに、三日半ほどたった——。

三人は、森から光る大きな葉っぱを見つけて来て、力いっぱい大きくふった。望遠鏡で空を見上げていた男の子がそれに気づいたことから、緊急ニュースが放送された。

しかし、いん石のスピードが落ちることはない。地上から一万キロメートル。地球に最大の危機がせまっていた——!!★
苺達は、お城に向かっていった。もう一度くわしく説明してもらおうと思ったからだ。

「ねえねえ、あそこにいる人だれ？」

真琴が指さした先には、白髪の老人がいた。とても悲しそうな顔をして道の端に座っていた。

「あ、あのー、どうかされたんですか」

「ああ、私がつと力を持っていれば……ああ、私のせいだ。私のせいでカギをうばうことができなかつたんだ」

イチゴ



「ええ！ カギ？」

三人が声をそろえて言った。

「そのこと、くわしく聞かせてもらえませんか？」

凜が聞いてみた。

「だれだか知らんがまあいいだろう。あれは、三百年も前のことじゃ。昔、平和のカギと平和のカギ穴の二つをめくり、争いがおきたんじゃ。この二つは、あるお城の中から発見された。そのカギをカギ穴にさすと陸がすべてつながり、国などの境がなくなり、争いがなくなるという伝説があるんじゃ。その発見は、世界中で大ニュースになった。それらが見つかったことによって、世界の人々の意見が二つに割れた。一つは、平和を願ひ、カギをカギ穴にさそうとしていゝる人達。もう一つは、平和を願わない、カギとカギ穴を封印してしまおうと思ゝう人達。両者がカギとカギ穴をめくり、戦った。結果、平和を願わない人達が勝った。負けた方は、月よりも近いチコ星へ送るという条件だった。だから平

和を願った人々はチョコ星へ送られたのじゃ。カギ穴を持ったまま……」

苺が質問した。

「このチョコ星に地球人がたくさんいるってことですか？」

「そういうことじゃ」

三人は驚きを隠せない。

「話を続けるぞ。そこで、チョコ星に送られた人達は、地球にいる人達をうらみ、地球滅亡計画を実行したのじゃ」

「そんなことがあったんですか。教えていただきありがとうございます」

凜がそう言い礼をすると、苺と真琴もあわてて礼をした。

「急いで地球の人達に知らせなきゃ！」

苺があせっていると、凜と真琴は

「でも、どないしたらええんやろう」

「うーん」

と悩んだ。そのとき、

「カギ穴に三人で一緒に手をふれ、地球に行きたいと願えば、地球に戻れるかもしれない……」

さっきのおじいさんだった。三人は突然の言葉に驚いたが、今はおじいさんの言葉を信じるしかない。カギ穴を探すしかないのだと確信した。なんと！カギ穴はお城近くの山の中にあるらしい。

「と、とりあえず行こうよ」

「そうやな」

「行こ、行こ！」

探し始めると、カギ穴は簡単に見つかった。三人は急いでかけよった。

「せーのっ」

三人の手がカギ穴にふれると同時に、月明かりのような光を浴び、三人はカギ穴の中にすいこまれていった……。

しばらくして三人が目を開けると、地球に戻っていた。

「よかった。地球に戻れたよ」

「とりあえず警察の人に相談しよ！」

三人は警察に行つて、これまでのことを説明した。

「あはははは。チコ星が地球を滅亡させるために落ちてくる？ そんなことあるわけないやろ」

と言われた。どこの警察署へ行つても同じようなことを言われ続けた。

「もうええわ。うちらで解決しようや！」

「うん！ そうしよ！」

「なあなあ、思たんやけど、星をいん石として落とすつて言つたつて、コンピュータで操作しとるんとちやう？」

「ほんまや！ そうかも」

「もう一度戻つてうちらでとめよう」

三人はもう一度カギにふれ、チョコ星へ戻った。

「よし、お城に行つてコンピュータをこわそ！」

「そうや、警備員になりすまして行つたらええんちゃう？」

「うん。そうしょ！」

コンピュータは案外はやく見つかった。

「後はマコ、たのむよ！」

「いっちょやつたらるか」

真琴がコンピュータに向かつて、持ってきた大きな石を投げつけた。コンピュータはめちやくちやに壊れていった。

「やったあ！ でも急がなきゃ」

急いでカギ穴のところに行き、三人は無事地球に戻った。チョコ星とは時の流れが違い、帰ったときは、三十分しか経っていなかった。

そのころチョコ星では……。

「オウ！ タイヘンデス。コンピュータガコワレテイマス」

「ナンダツテ！ ワレラノケイカクハカンペキナハズナノニ……ドウシテダ
そんなことを言っているとお城も壊れてきた。

「コワシタヤツメ、オボエテロヨ」

こうしてチコ星は止まった。

莓達は何事もなかったように生活している。

「今日も遊ぼう！」

「うん。いいよ」

「じゃあ、凜の家、集合！」

「また後でねー」

三人は地球を救えたけど、今の地球に戦争は絶えない。それは、昔平和を願わない人達が地球に残ったからだろうか。地球が滅亡してチコ星になっていたら、争いのない平和な星になっていたのだろうか。

5つのキーワードを探せ ～町に隠された暗号～

各務原市立緑苑小学校

六年

よねぐらに
米倉仁衣成

ひらた
平田千世

さかきばら
榊原奈夕

←

敦賀市立西浦小学校

六年

てらもと
寺元

なつき
菜月

「あーあ」

と、学校の帰り道にため息をついた。

「また明日も学校に行かなきゃいけないのかあ。いやだなあ。怜奈ちゃんに会いたくないなあ」

と、うかない顔をしているのは岩本葵。東京都東小学校の六年生で、ごくふうのもの静かな女の子。今は友達同士のゴタゴタで悩んでいる。

（神様が悩みを解決してくれたらなあ）

そう思った葵は思わず空を見上げた。すると、きらきらとした光につつまれたチヨウチヨのようなものが現れた。その姿はだんだんはつきりしてきた。葵がぼう然としてみると、

「私はようせいのリリー。神様ではないけれど、ようせいも神様みたいなものよ」

と、とつ然話し出した。葵はおどろいて、

5つのキーワードを探せ ～町に隠された暗号～



「えっ、あなた、ようせいなの？」
と聞いた。

「そうよ」

「でも、何でようせいがここにいるの？」

「あなたの悩みを解決しに来たのよ」

そう言ったリリーは、ポケットにすっぽり入るくらいのごく小さなようせいだった。

「さあ、あなたの悩みを教えてください」

葵は一瞬とまどったが、この小さなようせいを信じて、思い切って話してみることにした。

「ふーん。とにかく、その子と仲良くなりたいのね」

葵は小さくうなずいた。

リリーは少し考えてから、

「それじゃあ、私が住んでいるおとぎの国に連れて行ってあげる」

「えっ、何？ ちょ、ちよつと待ってよっ。本当におとぎの国に行くの？」

いたずら好きなリリーは葵の返事を待たずに、キラキラ光るつえを取り出した。そして、

「ミラクル、ミラクル、レインボー☆」

と、不思議な呪文を唱えた。

すると七色の光につつまれた町が現れた。

「うわあっ、すごーい！」

葵は目をキラキラかがやかせた。

「まずは、おとぎの国の女王様に相談してみたらどう？」

リリーが言った。少し歩くと大きくて七色にかがやくお城が見えてきた。お城の門番に導かれて女王様のところへ行くと、

「この子の相談にのってあげてください。お願いします、女王様」

と、リリーが言った。

「分かりました。あなたの悩みは何ですか？」

女王様のおごそかな声を聞いて、葵は安心して話すことにした。

「実は友達とのゴタゴタで悩んでいた時に、リリーに会ったんです。そして、おとぎの国まで来ました」

そこで女王様は、思いついた表情になった。

「そうですか。では、こうしましょう。ここ、おとぎの国には、友達との悩みを解決するためのキーワードがあります。国中に五か所、いろいろな所にかくしてあるので、探してみてください。もし、あなたとリリーだけの力で見つけることができたならば、キーワードが集まって解決してくれます」

「本当ですか？　ありがとうございます」

葵とリリーは顔を見合わせてほほ笑んだ。

「それじゃあ、葵。いっしょにキーワード探しの冒険に出よう！　女王様、あ

りがとうございました」

二人は女王様にお礼を言って城を出た。そして、キーワード探しの冒険が始まった。★

リリーと葵ははりきって城を出たが、初めにどこへ探しに行けばいいのかなやんでしまった。

「ねえリリー。どこから探せばいいと思う？」

「それがねえ、私もちょっとしか分からないのよ……。あつ！ そう言えば、このおとぎの国の地図があるのよ。その地図を私、持ってるの」

そう言うと、リリーはポケットから一枚の地図を出した。

「へえ、この国は五つに分かれているんだあ」

と葵が地図を見て、おどろいた表情で言った。するとリリーが、

「私が思うには、女王様は五か所にかくしてあるって言ってたでしょう。だから、花の町、星の町、まほうの町、太陽の町、月の町に一つずつあると思うの。」

まず、一番近い花の町に行こう」

と言うと、リリーはつえを出して、

「ミラクル、ミラクル、レインボー☆」

と、呪文を唱えた。すると、花がいっぱい咲いている野原に着いた。その真ん中に看板が立ててあった。

「あそこに看板が見える！ リリー行こう」

と言うと、二人は急いで行った。そこには、『あ』と書いてあった。

「『あ』って何だろう？」

「でも、これが暗号なんだろうし、次の町、星の町へ行こう」

「急ごう、急ごう」

「ミラクル、ミラクル、レインボー☆」

次は、夜みたいになつて暗な町で、空には、星がいっぱいあった。すると、また看板があった。それには、『や』と書いてあった。

「さっきのが『あ』で、今のが『や』で、『あ・や』って何なんだろうねえ？」

「でも葵、あと三つなんだから、次の町のまほうの町へ行こう。ミラクル、ミラクル、レインボー☆」

次は、むらさき色の空で、不気味な家が並んでいた。

「ねえリリー、何かこわい町だねえ。それに全然看板ないねえ」

だいぶ歩いたとき、目の前にでっかい家が出てきた。すると、その家の庭に、暗号が書いてある看板を見つけた。葵は、こわくて見に行けないので、リリーが飛んで見に行ってくれた。

「リリー、暗号は何だった？」

「『ま』って書いてあった」

「『あ・や・ま』だから、あと二つだ。えっと、次は、太陽の町だ」

「よし！ 行こう。ミラクル、ミラクル、レインボー☆」

そこは砂ばくが広がっていて、すごく暑いところだった。

「太陽の町だけあつて暑いね」

「そうだねえ、暑いね」

「それより早く暗号探そう」

と葵が言つて、二人は歩き出した。すると葵が、

「あつ！ あそこに看板がある」と叫んだ。

「『ろ』 って書いてある」

「次は、月の町だね。早く行こう」

「うん。ミラクル、ミラクル、レインボー☆」

月の町は、三日月の形をした町だった。うす暗くて、とても神秘的な所だった。

「ここは、何にもないね」

「そうだね。でも、看板を見つけやすいね」

二人が歩いていると、看板があった。そして、看板の横に女王様が立ってい

た。女王様が、

「最後の暗号は『う』です。全部の暗号をつなげて言ってみると、『あ・や・ま・ろ・う』です。葵ちゃんは、怜奈ちゃんにあやまるといいですよ」と言っていると、リリーが言った。

「じゃあ葵、怜奈ちゃんの家まで送ってあげる。それじゃ行こう。ミラクル、ミラクル、レインボー☆」

すると、怜奈ちゃんの家の前に着いた。前から、怜奈ちゃんが歩いてきた。

「リリー、私、あやまって来るね」

「がんばって！」

葵は、かけ足で行った。

「怜奈ちゃん、ごめんね。私のせいであんなことになって」

すると、怜奈ちゃんは、

「別にいいよ。これからも仲良しでいようね」

「うん」

「よかった、よかった」

そう言っつて、リリーはおとぎの国へ帰って行った。

うさぎのピョン太と 不思議なブックランド

各務原市立蘇原第二小学校

六年

森下 真菜
もりした まな

高須 咲良
たかす さくら

加藤 智子
かとう ともこ

敦賀市立沓見小学校

六年

前田 光里
まえだ ひかり

梅野 葉月
うめの はづき

森田 瑠泉子
もりたる いこ

森 真生
もり まさき

吉田 梓
よしだ あずさ

高松 葉
たかまつ しおり

松 創萌
まつしま はじめ



ガタンッ。

「いったあー」

はあ……また、今日も妹の竜香がベッドからころげ落ちている。

ぼくの名前は、佐神竜斗。小学六年生。ぼくは冷静沈着型で、行動する前に考えるタイプ。それに比べて、双子の妹の竜香はぼくとはまるで正反対で、気が強く好奇心旺盛で行動力がある。

「ねえ、竜斗。昨日の夜、『ちゃんと起こしてよ』って言ったじゃん！」

「はいはい。そうでしたね」

妹はいつもこうだ。ねぼけてベッドから落ちると毎回ぼくのせいにする。いかげんぼくも慣れたけど……。

「ねー、竜香。今日鈴達と遊びに行く約束したはずだよね」

「そうだった！ すっかり忘れてた」

竜香はそうさげびながら、あわてて階段を駆け上がって、バタバタと出かけ

る準備をした。

「コラッ！ 竜香うるさい！！ 近所迷惑でしょ。もう少し静かにできないの」
「はいはい。今、急いでるの！」

あきれた顔をして怒っているお母さんには目もくれず、竜香はお気に入りの真つ赤なりユツクサツクに、筆記用具、財布などをどんどんつめこんでいった。

「おはよう。お母さん」

ぼくがあいさつをしているうちに、竜香はもう準備を終え、玄関から飛び出していた。

「えっ、ちよつと待ってよ、竜香」

ぼくも急いで荷物を持ち、竜香を追いかけた。

今日一緒に出かけるのは、下谷カイト・佐倉鈴・白河れん・高原希穂の四人。

ぼく達は、幼稚園からの幼なじみだ。カイトは運動神経ばつぐんだけど勉強が苦手で、すごいめんどくさがり屋。鈴は、クールだけど怖がりだ。れんは子供っ

ぼいけど、実はIQ三百!! 希穂は竜香と同じく好奇心旺盛な女の子で、いざという時役立つすぐれ者だ。

今日から夏休みだから、ぼくの田舎のおじいちゃんの所へ、六人で遊びに行く約束をしていた。おじいちゃんの家は、電車で一時間くらいの自然豊かなところにある。

ぼく達が集合場所のABC駅に着いた時には、もう四人ともそろっていた。

「おっそーい。十分三十一秒ちこく。電車に乗りおくれちゃうよ」

IQ三百のれんは、正確にちこくの時間を言った。そんなこと言わなくていいのに! ぼく達は急いで切符を買い、ホームに行くところちょうど電車が来た。それは、赤・黄・緑・青などいろんな色をしていて、初めて見る変な電車だったので、不思議な気持ちでした。

「早く乗ろうよ」

カイトの元気な声におされるようにして、ぼく達は電車に乗りこんだ。電車

の中には、ぼく達以外お客さんがいなかった。

「やったあ！ 貸し切りだ」

れんは大喜びしながら、外の景色を見たり声をあげたり、まるで一年生みた
いにはしゃいでいた。

「まったく、れんだったら……」

（こんにちは）

小さな子どものような声がぼくの頭の中で聞こえた。

（竜斗君、久しぶり）

また、同じ声の頭の中ではつきりと響いた。誰かがいたずらしているのかと
思い、みんなを見回した。

「ねえ、誰か今、しゃべった？」

「え、誰もしゃべってないけど」

「空耳だよ」

空耳かな、と思った時、いすのかけに白いものがちらっと見えた。近づいてみると、白いものがよきつと顔を出した。

「うわあ!!」

それは、目がクリクリツツとして、ひげがピーンとはった、真っ白なうさぎだった。首に金のリボンをしていたので、ピョン太だとすぐに分かった。一年前、小学校の運動場に『お願いします』の手紙と一緒に捨てられていた。今は、ぼく達六年生が大事に育てている。

「あつ、ピョン太だ！ 学校にいるはずのピョン太がどうしてここに?」

みんなもピョン太を見ておどろいていた。

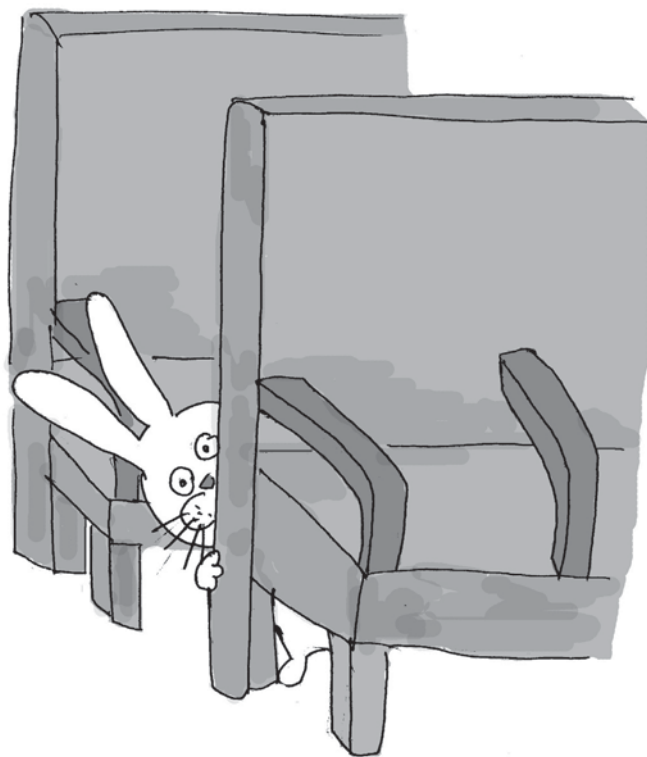
「ぼく、ピョン太！ 竜斗君、ぼくのことわかる?」

ピョン太はひげをピクピク動かしながらぼくに話しかけてきた。

「う、うん」

みんなには、ピョン太の声は全く聞こえていないらしい。心臓がドキドキし

うさぎのピョン太と不思議なブックランド



てきた。ピョン太と話せるなんて、すごく変な感じがする。

「で、ピョン太、何でここにいるの？」

ぼくは思い切って聞いてみた。

「えっ、竜斗。ピョン太と話せるの!？」

竜香達は、おどろいてぼくとピョン太を取り囲んだ。

「竜斗君、ぼくが今ここにいるのは、竜斗君達をある場所へ連れて行くためなんだ」

「ある場所って？」

「それは、行ってからの楽しみ！」

すると、急に電車が止まって扉が開いた。そのとたん、ピョン太が勢いよく出て行ってしまった。

「ねえ、私達も行ってみようよ！」

希穂はそう言うが早いか、ピョン太の後について電車を飛び降りた。ぼく達

五人もあわてて外に飛び出た。

そこには花畑が広がっていた。だけど、その半分くらいがかれていた。

「何でかれているの？」

ぼくがたずねると、ピョン太は真剣な顔になって、

「今、このブックランドには、危機がせまっているんだ!!」★

ぼくは、ピョン太が何を言っているのか分からなかった。ブックランドの危機？ そもそもブックランドって何だろう？

すると、ピョン太はぼくの心の中を読んだように、少し自慢気に言った。

「ブックランドとは、『本の国』という意味で、まあ君達から見たら、ガーデンングもやっている図書館ってとこかな」

「へえ、こんなところに図書館があったなんて……」

「図書館？」

れんは言った。そういえば、みんなにピョン太の声は聞こえないんだ。ぼく

はみんなにすべてを話した。するとカイトが、

「どうしてそんな所に危機が来るんだ？」

と言った。ピョン太が、

「その危機はぼくが作ってしまったんだ。ブックランドの命の黄金のブックをなくしてしまったんだ」

「その黄金のブックって、そんなに大事なのかい？」

ぼくは言った。するとピョン太は、

「この黄金のブックがなくなると、ぼく達がブックランドに住めなくなっちゃうよ」

ピョン太が言ったことをみんなに話すと、れんが、

「じゃあ、その黄金のブックで、ブックランドが成り立っているということなのか？」

「うん。そうだよ」

とピョン太が言う。

「えっ！ それって、どういうこと？」

竜香が言うと、少しおこったように鈴が言う。

「だから、その黄金のブックがなくなると、ピョン太の住む所がなくなるんだってば」

「あ、そういうことか！ でもおこらなくたって……」

竜香は少しすねているようだ。

「でも、ブックランドに住めなくても、学校でも住めるんじゃないか」

ぼくは言った。

「ぼくも、最初はそう思ったけど、ブックランドがなくなると、ぼく達は生きていけなくなるんだ」

ピョン太が言った。そのことをぼくがみんなに伝えると、

「えええ！」

竜香以外がさげんだ。竜香はまだすねていた。そして小声で言う。

「それならさ、黄金のブック、探しに行けばいいじゃん」

「うん、そうなんだ。黄金の笛があったら探せるんだ！」

ピョン太が言う。ぼくがみんなに話すと、鈴が聞く。

「ふうん。で、今ピョン太はそれ持ってるの？」

「うん！ バッグに入ってるよ。今出すね」

「今出すってさ」

ぼくが言う。

「ん？」

「何？ ピョン太」

とぼく。

「黄金の笛……なくしちゃったみたい」

「え！ なくした？ 黄金の笛を？」

ぼくがさけぶと竜香が、

「あゝあ……、ピョン太ならありうるけどね！」

「どっかに落としたのかなあ」

「落としたかもだって？　なら探そう」

ぼくが言った。

「……それより一度、ブックランドから出ないか？」

れんが言う。と、カイトが聞く。

「なぜだ？」

「だってさ、今ここでぼく達が黄金の笛探したって、こんな広い花畑から見つ

けられる？　それならもどってぼく達の町の図書館で探した方が可能性はない

か？」

と、れん。

「うーん……でも残って探して笛を見つけて、本を探した方が早いわよね……」

みんな、なやんだ。

「それは、ピョン太が決めるだろ」

カイトが言った。

「ぼくの『ひげ』によると、黄金の笛はブックランドの下にあるらしい」

ぼくがピョン太の言葉を伝えると、れんが言う。

「ブックランドに残ろう！ ピョン太の『ひげ』を信じよう」

「ピョン太。ブックランドの『がけ』に連れて行って！」

「なんで『がけ』なの？」

希穂は聞く。

「決まってるだろ！ 下といっても地下のわけないじゃん。だから、がけにおとしたってことだよ」

「あくそうか」

五人全員納得。

「がけは、あそこしかない！ しあわせのがけに行こう」

「よし。みんな、しあわせのがけに行こう。ピョン太、案内して」

「OK」

ピョン太の走るスピードの速さにみんなびっくり。汗を流して必死に走り出す。着いたときには、みんなほっこり。

「ここだよ」

見ると、とても高いがけ。

「あった」

目のいい竜香は、下にとっても小さな光があるのを見つけた。しかし、ここはがけ。どう下りようか、全く分からない。竜香が言った。

「長〜いロープを使ったら、下りられるんじゃない？」

「そうか！ ……でもロープなんてどこにあるんだよ！」

とれんが言うので、ぼくが、

「ピョン太！ 長〜いロープ持ってない？」

「う〜ん？ ……たぶん持ってない。でも、一応、見てみる」

ガサゴソとバッグの中をあさっていると、

「う〜ん……あつたけど、短いなあ〜」

カイトが、

「そのロープをほかのロープとつなげてみたら？」

「そのほかのロープがないじゃん」

と希穂。

「ほかの手を考えよう」

とぼく。すると、れんが言う。

「長いはしごはどう？」

「でもそんな長いはしご、どこ探してもないよ！」

と竜香。

「なかったら作ればいいさ！ 元の世界に一度もどれば、材料だってたくさんあるし」

とれんが言う。

「そっかあ！」

みんな納得！

ぼくらは、もう一度あの不思議な電車に乗って元の世界にもどった。そしてカイトの家に行った。カイトのお父さんは大工なので、はしごやたくさんの材料があるのだ。ぼく達は材料をあれこれ選ぶより、ふつうにはしごを持っていくということになった。ぼく達ははしごを持ってブックランドにもどった。

はしごを持って行くと、ピョン太はともうれしそうにはしごを持って、しあわせのがけに走った。ぼくらが、しあわせのがけに着いたときには、もうピョン太は黄金の笛を取りに行ったところだった。

「ありがとう！ 黄金の笛を拾えたよ！」

ピョン太はそう言つて、はしごをカイトに返した。

「これ、どうしよう……」

カイトはあせりながらも、はしごを受け取った。

「よおし！ 黄金のブックを絶対に見つけ出すぞ！」

そして、思いつき「ピーッ」と笛を鳴らした。

その笛の音と同時に、ぼくらはまぶしい光に包まれた。

気がつくと、そこは図書館だった。

「ここはどこ？」

と竜香が言う。

「もしかして……学校の図書館？」

とぼくが言った。

「あっ！ 見て、あの本」

れんが指さすさきには、光りかがやく黄金の本があった。

「もしかして……これが黄金のブック!?」

鈴がちよつとうれしそうに言った。

「そうだよ！ やった！ ついに見つけた！」

ピョンピョン跳びはねながら、ピョン太もうれしそうに言った。

「でも学校にあったのなら、どうして気がつかなかったんだろう」

希穂が不思議そうに言う。

「それはブックランドの住人が近づかないと、黄金のブックは本来の力を発揮できないからだよ」

とピョン太が答えた。そして、ピョン太が黄金のブックを手を取った瞬間、またぼく達はさつきと同じまぶしい光に包まれた。

気がつくと、あの同じ電車の中だった。

ぼく達は、おじいちゃんの家で夏休みを楽しく過ごした。

夏休みが終わって学校が始まった。ぼくは思った。

（あれは夢だったのだろうか）

学校の図書館で黄金のブックがあった場所を探した。でもその場所には違う本が入っていた。その本の題名は『うさぎのピョン太と不思議なブックランド』。

友好の架け橋「リレーメルヘン」

二〇〇一年に始まった敦賀市と各務原市の子どもたちが共同で創り上げるこの「リレーメルヘン」は今年で十一回目を迎えました。これまでに出会ったこともない全く知らない両市の子どもたちがリレーをすることで物語を創り上げるこの取り組みこそ、まさに夢の「メルヘン」の世界のように思われます。

今年は、物語の前半を各務原市の子どもたちが、後半を敦賀市の子どもたちが担当しました。どの作品を読んでも、子どもたちの想像力の豊かさに感心するばかりです。大人の私たちにはとても描くことができない世界です。舞台は様々ですが、どの作品にも仲がよい友達、あるいは家族が登場します。スリルあふれる展開、ときどきするような場面がありますが、すべての作品がハッピーエンドで結ばれています。こうしたことから、子どもたちの心の温かさを感じることができません。また、本の世界に入り込んでしまう作品や、本に囲まれた

場面が登場する作品もいくつかあります。活字離れと言われる現代の子どもたちですが、両市の子どもたちにとっては、本が身近なものになっていることがうかがえます。

最後になりましたが、敦賀市と各務原市の友好の架け橋となる「リレーメルヘン」を誕生させていただきました両市の図書館の皆様方、各小学校の先生方、そして作者である子どもたちに、心から感謝いたします。

各務原市立稲羽東小学校長 中島 玲子

あとがき

今年も、たくさんのリレーメルヘンが出来上がりました。

豊かな創造力を発揮して書き継いだメルヘンの数々は、私たちを楽しいメルヘンの世界へ誘ってくれました。普段からメルヘン物語を書いているのではないかと感じさせる作品、そして表現方法の巧さ、想像力の豊かさを感じさせる作品が数多く見られました。メルヘンとは、現実生活の中で起きるちよつとした不思議な事、微妙なズレによる出来事から生まれるのでしょうか。四歳頃から、自分に備わっている想像力を働かせ、ファンタジーの世界で生きたいという欲求が出てくると言います。そして、メルヘンを受け入れるとき、自分をメルヘンの主人公に同化し、ファンタジーの世界に没入すると言います。この本を読んだ皆さんは、「楽しそうだ。自分も書いてみたい」ときつと思ったはずです。物語を書くということは、今、注目されている「思考力」「判断力」「表

現力」をつける学習でもありません。

何が起こるか分からない、新たなものが次々と出現する時代に私たちは生きています。このリレーメルヘンを書いた皆さんなら、次々に立ちふさがる困難・課題をも解決していけるでしょう。何もない状態からこのようすばらしい物語をつくりあげたのですから。そして、リレーして一つの作品に作り上げたのですから。

最後になりましたが、このように素晴らしいリレーメルヘンの完成に関わって下さった両市図書館の皆様と各学校の先生方に、心からお礼を申し上げます。

敦賀市小学校教育研究会学校図書館部長

福住 龍二

あとがき

今年、各務原市立中央図書館は開館二十周年を迎えました。

「本」をテーマにしたまちづくり事業「本の街かかみがはら」も始まりました。本の街を目指す取り組みのひとつ『リレーメルヘン』の制作は、平成十三年度に敦賀市立図書館の新館オープン十周年を記念する事業のひとつとして始まったもので、今回で十一冊目となりました。

児童一人一人が本に触れていたたく絶好の機会であり、子どもたちが「物語」の世界を味わい、感じ、話のイメージをどんどん膨らませていくことで、非常に有意義な時間が過ごせたのではないかと思っています。

子どもたちのみずみずしい感性で制作された楽しいメルヘン作品を通して、今後も敦賀市と各務原市の子どもたちが制作の楽しさだけでなく、交流の輪も広がっていけば、これほどうれしいことはありません。

今回のリレーメルヘンに参加していただいた小学生の皆さん、ご指導いただきました先生方、作品集の発行にお力添えくださいました関係者の皆さんに心からお礼申しあげます。

各務原市立中央図書館長 小林 義博

あとがき

リレーメルヘンは平成十三年度に敦賀市で誕生し、平成十四年度からは各務原市と、前編と後編を交代で書いてリレーする今の形になりました。十一冊目となる今回は、各務原市から敦賀市へと受け継がれました。

どの作品も想像の翼を心のままに広げてのびのびと書かれており、私達を不思議の世界へといざなってくれます。

リレーメルヘンと出会い、見知らぬ者同士で一つの物語を作り上げたことは、きっと皆さんの大切な思い出になると思います。

このリレーメルヘンを契機として、各務原市と敦賀市の友好の輪がさらに広がることを願っています。

今回のリレーメルヘンに参加してくださった小学生の皆さん、校務ご多忙の中ご指導いただきました先生方、作品集の発行にお力添えくださいました

関係者の皆さんに心からお礼申し上げます。

敦賀市立図書館長

竹本 正和

リレーメルヘン①
一冊の白い本

2011年12月1日発行

発行者 敦賀市立図書館

発行所 敦賀市立図書館
敦賀市東洋町2-1

TEL 0770-22-1868

<http://lib.ton21.ne.jp/>

